

---

# 忘我邸にて

十二回

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

忘我邸にて

### 【Nコード】

N3175P

### 【作者名】

十二匣

### 【あらすじ】

希望無き女子高生、虚祁優月特に将来への展望も無く大学生となり、唯一の趣味から所属する事にした同好会は残念な人外達の巣窟だった。これはそんな彼女がからかったりからかわれたり、突っ込んだり突っ込まれたり、普通に日々を送っていれば出来ないであろう経験を糧とし成長（主に残念な方向へ）していく日常を描いた物語……の筈だったんだけど、何処かでとち狂った模様。何にせよ頭を使わず気楽に読める作品になる予定

とりあえず

## 開幕 虚祇優月の独白（前書き）

残酷、流血、猟奇描写が時折含まれます。苦手な方はご注意ください。

## 開幕 虚祇優月の独白

コレから話す出来事はちょっと人を超えちゃったヒト達と物凄く人を超えちゃった人達ともはやヒトなんて存在なのかどうかすら信じられないモノと普通のヒト、つまりは私とのお話。

出てくる人達は一人残らず一欠けらの情けも無く真っ黒なのに話はどこまでも白黒つかず結局灰色のまま。

れっきとした形が在ったのは始めだけ。段々と拡散して風呂敷は広がって気が付けば何処までも、境界線も見つからないまでに曖昧模糊としている。

誰もが鼻で笑って馬鹿にして苦笑を浮かべて、そんな反応を示す話。

当たり前だ。私だって当事者にでもなつて自分の目で見て体験でもしてこない限り信じられる筈がない。

それほどに荒唐無稽で矛盾していて適当で曖昧であやふやで掴み所がない。そんなヒト達とヒトっぽいヒト達とヒト？とヒトと私のお話。

でも真実だからしょうがない。別に真実がこの世で一番重要だとか大切だなんて言う気は全く無い。大抵真実なんてモノは知らない方が良かったと思わせる事の方が多いし、それに少なくとも真実と思える事は当事者の胸の中にだけあれば良い話だと思う。

だから別に私がこんな話を語る理由もなければ必要も何も無いんだけど、なんでこんな話をする気になったのかといえればそんな気持ちを表す言葉は一つしかない。

そう、単なる気まぐれ。

## 第一幕 そうだ、旅行に行こう？ side 虚祇

「旅行に行こう。」

唐突に、本当に何にも前触れ無くそう言ったのは玖韻先輩クインだった。メンバーは何時もの顔ぶれ、私を含む6人。

場所は何時もと同じく玖韻先輩の家の一部屋。

ゲーム専用部屋と名付けられたこの部屋、極端に物が少なく黒い円形のソファーに吸音マットを敷かれた硬質硝子の丸いテーブル。

照明は部屋の四隅に取りつけられたカンテラ型のランプが程よく温暖色の光を放っている。

目の前のテーブル上にはダイスとキャラクターシートが散らばっている。

「はあ？そう言う事は月初めに言いや、オニイサン今月あと三千元で過ごさなあかねんで？」

いち早く反応した霞桜先輩カザクラに玖韻先輩がニヤリと笑った。

因みに今日はまだ七月三日。十分月初めだと思うのは私だけなのか他のメンバーもそうだと頷いている。

「安心しなさい、俺の奢りだ。」

玖韻先輩が女性的過ぎる顔に男前な笑いを浮かべていた。

そもそも、私、虚祇優月ウツロギユツキがこうして玖韻先輩の家に出入りするようになったのにはそれなりの理由があり出会いがあるわけなのだが、それを語りだすと色々長くなるので今回はパス。

端的にあつた事だけを述べるなら、大学に入学　トラブル　知り合う。となる。詳しくは機会があればまた語ろうかと。

さて、私が入学して約3ヶ月経った七月三日。この日、何時ものように暇を持て余した私は、同じような理由で玖韻先輩の家に訪れていた何時ものメンバーでゲームに興じていた。

因みに今回行っていたのはTRPGテーブルクロールプレイングゲームそれぞれが世界各国の国家元首となり、統一を目指すという内容だった。

結果は頭文字がCで始まる国を選んだ太刀風先輩が核を撃った為第三次勃発。ゲームオーバーとなった。

深夜三時を越えた頃、その日のゲームも終わり、お茶を飲みながら反省会をしていた時、唐突に玖韻先輩が「旅行に行こう」と言い出したのだった。

玖韻先輩。本名　玖韻玲音クインレイン

本名かどうかは公式な書類を見せて貰った訳でもないから知らないけれど、そう名乗っている。

女性のような名前だけど性別はれっきとした男性……だと思う。何故思うのかと聞かれれば未だにどうも自信が無い。容貌が女性的すぎる所為だ。せい

何時も人を小馬鹿にしたような顔を浮かべて細長いメンソールの煙草を時折啜えている。ただし火が着いている所は見たことが無い。聞いた話だと煙草の煙は主流煙も複流煙も嫌いだという。ただ、口に煙草を啜えるという仕草が好きなんだそう。フロイト好きに聞かせればさぞ鬱陶しい解釈を述べてくれるんだろう。

ユングだったかな？

それはさておき  
閑話休題

詳しく話を聞けば玖韻先輩の親戚が純和風旅館を経営しているという。そこを今年若年層にも手を出そうと一部若者向けに改装し、モニターとして玖韻先輩に話を持ち掛けたのだと言う。

「そして、ココが重要な所何だけど」

一端言葉を切って濃い目に入れた緑茶を一口。

「出発は明後日<sup>あさって</sup>」

その言葉に全員、といっても五人だけど私も含めて五人が顔を上げた。

「ちょい待ち、明後日てどないやねん？」

関西出身にしては何だか怪しい関西弁の霞桜先輩<sup>カザクラ</sup>。

「そうですよ、何でそんなに急なんですか？」

敬語の鴛淵先輩<sup>オシフチ</sup>。

「OH、そのとーりデスネ、玖韻先輩？」

自称日系二世のキース先輩。この人の喋りもどうも胡散臭い。というか態<sup>わざ</sup>とだ絶対。

「楽しみね、優月」

にっこりと、少々ねっとり微笑みながら私を見てくるのは太刀<sup>タチ</sup>風先輩<sup>カゼ</sup>。

「安心したまえ、交通費も奢りだ。」

「そう言う問題じゃ無いですよ!!」

無いやろ?!」  
無いデース!」

奇しくも3人の意見が一致した。  
太刀風先輩は手を合わせて夢現な顔ゆめうつをしている。

「ゆづはどう、何か予定入ってる?」

そんな3人を無視して私に玖韻先輩が聞いてくる。

「いえ、大丈夫ですよ。」

彼氏や彼女がいる訳でもなく、知り合いはいても友人がいる訳でも無い私は見事に夏の予定がフルに空いている。

それが良いことか悪い事はさておくとしても、少々悲しい。

「よし、それなら決定、集合場所は明後日の朝8時、JR福岡駅筑紫野口。OK?」

私もこの3ヶ月でこの先輩に細かい事を言っても通じない事は良くわかつている。

大きい事も通じない。

当然ながら私より付き合いの長い先輩方はそんな事熟知している訳で逆らいもせず、

「……お……」

と力なく返事をしていた。

因みに太刀風先輩は夢見る少女って歳でも無いのに今だ遠い目をしながらぶつぶつ言っていた。

合掌。





## 第一幕 そうだ、旅行に行こう？

二日後、私達は困っていた。

まだ朝の8時過ぎなのに日差しは私達の影でもアスファルトに焼け付けるかの如く照り付けてくる。

だったら駅構内で待っていれば良いという意見もあるのだが、待ち合わせ場所は駅入り口。それに私は駅構内に漂う名物らしきお菓子の甘ったるいココア風の臭いが実に苦手なのだ。

「……遅い。」

背中で鳳凰と竜が噛み合う何とも末期的な柄のシルクシャツを着た霞桜先輩が呟く。

アイボリーのリネンジャケットを肩に掛け、何時もと変わらないオールバックにサングラス、開襟シャツの太い首や手首に光るゴツイゴールドアクセサリーの姿はどこからどう見ても、一切の弁解の余地無くVシネマの中にしか存在しなさそうなヤクザだ。

さらに腰に挟み込まれたどう見ても銃にしか見えない物に関して違和感が無さすぎてツツコミをいれる気も起こらない。

とりあえずその手に下げたジュラルミンらしきスーツケースと自分の手を手錠で結ぶのだけでも止めてくれないものだろうか？

「まったく、暇つぶしに誰か襲ったるか……」

不穏な言動も何時もの事なので聞き流してキース先輩と鴛淵先輩に顔を向ける。

キース先輩、本名キース・相良・アウレリウス<sup>サガラ</sup>

特徴はその目立つ緩いカールの掛かった砂色の金髪と青い瞳。

どこからどう見てもアングロサクソンな外見なのに日系二世と妙に強調する変な人だ。慣用句や諺が好きなのかよく使うけど、どれも微妙に間違っている。本気なのか洒落なのか区別が難しい所だが、偶々街中で出逢った子供連れの教授に「子はカスが良い（子はかすがいい）」とか真面目な顔で言っていたからかなり胡散臭い。

何にせよ喋り方といいそのキャラクターといいどうにも噓くさい人だ。

それにしても仮に日系二世だとしたら何処の人とのなんだろう。個人的意見としては名前の語感から考えるとギリシャ系の気がするけど……あんまり興味無い。

二人で何を話しているのかは知らないけど随分盛り上がっている様子だ。そのまま私は視線を横にずらすと太刀風先輩が目に入る。

太刀風先輩、本名 タチカゼナギナ 太刀風凧那

セミロングの赤い髪と塗れた様に光る二重の目。美人で何処となく冷徹な空気が漂い悪役な雰囲気たんそくが漂う。黙って腕でも組んで立つてれば同性にも関わらず、嘆息を漏らす程に格好良い人だけど、内面は結構イタイ。何しろ可愛い娘に見境が無くて妄想癖があつて多情だからもう救いようが無い。始めて合つた時、最初は何だか良い人で気を許していたら二人きりになった瞬間襟首を掴まれ何をされるのかと身構える間も無くキスされ「ねえ、オネエサンと48時間耐久ペッティングしようか？」と笑顔で語尾にハートマークが付きそうな程に明るい口調で言われた時は霞桜先輩と違う意味で恐かった。

今の所毒牙にはかかっていない。

少々……思いきり身の危険を感じるけど、割合良い人だ………と思う。

因みに太刀風と言えば江戸時代にいた力士の名前らしいけど、何にも関係はないそう。

どこかの国のスモウレスラー、タチカゼなんたらとも関係無いそう。

そんな太刀風先輩が呆気に取られたような顔をして何処かを見ている。

「太刀風先輩、どうかしたんですか？」

何時もなら「なぎりんって呼んで」とかイタイ返答が返される筈なのに今回は無言で視線の方向を紅いマニキュアが丁寧に塗られた指で指差す。

太刀風先輩が無言で指差した方向を見て、私も思わず口が開いた。

「あれ、二人ともそんな顔してどうしたんです？」

鴛淵先輩が話しかけてくるので私も太刀風先輩に見習い無言で指差すと、そちらに顔を向けた鴛淵先輩とキース先輩の顔もぽかんと口を開ける。

「何や、どないしたん皆で罵迦面下げて？虫入るで？」

私達に話しかけながら霞桜先輩も顔をそちらに向け、そのまま呆気にとられた表情を浮かべる。霞桜先輩だけじゃない。通りを歩く人達も、駅から出てきた人達も足を止めそちらの方向に顔を向けひそひそと言葉を交わしたり呆気に取られたような顔を浮かべている。その方向には一人の女性がいた。

ただ、何と言うか、取りあえず朝の駅前にいるのはどこまでも場違いな人には違いない。

顔だけを見れば、文句の無い美人。項うなじの所で結わえられた艶やかで真っ黒な髪、向こうが透けて見えそうな程に白い肌、切れ長な目の上を縁取る様に蒼のアイシャドウ、唇は深紅。最近流行の化粧じやないけど美人としか言い様がない。耳には小さく蒼いサファイアらしきピアスが光っている。

そんな美人が一人物憂げな表情で未亡人御用達なんて言葉がピツタリくる黒いレースの日傘をさしてそこにいた。

しかし、いくら美人でもそうそう人が足を止めしげしげと見たりはしないだろう。が、それもその井出達いでたちによる。

人一人簡単に入りそうな巨大なトランクに足を組んで腰掛けた、それだけでも目立つのにその上女性にはチーパオ姿だった。

足の方から胸元に向かって渦を描く白蛇が刺繍された金縁取りの漆黒なチャイナドレス。限りなく深く入ったスリットからは真っ白な細い足が惜しげも無くさらされている。

同じ様に白く細い腕にはブレスレット、爪には青いマニキュアが塗られ細身の指輪を嵌めている。

そんな美人がトランクに足を組んで腰掛け物憂げな表情を浮かべ日傘をさしながら長煙管で煙草を燻らせているのだから目立たないワケがない。

……ここは日本よね？

左右を見るまでも無く南の日差しが暑い福岡のそれなりに中心都市。

決して高級娼館とか阿片窟じゃない。  
似たような店は沢山あるけど。

「……先輩？」

「……何かしら？」

「……よだれ拭いて下さい。」

太刀風先輩が慌ててハンカチで口元を拭く。美少女だけでなく美女も守備範囲のようだ。

私達がそんな会話をしていると横から「OH……ビューティフル……」とキース先輩の声が聞こえてきた。

と、その美人が此方を向きニコリと（花が綻<sup>はな</sup>ぶ）という慣用句（以前キース先輩は「花が朧<sup>おどろ</sup>昆布」と言った）がぴたつと来るような笑みを浮かべる。

「ハウンツ！」

そんな声を上げながら頬を赤く染め胸を押さえ、さらに膝をつく太刀風先輩。

そんな先輩はさて置き、その美人は猫のような仕草で華麗にトランクから飛び降り、その大きさにも関わらず軽がるとそのトランクを引っ張りながら此方に歩いてくると私の前に立った。

細い体形の割に身長は思ったより高くて私が見上げる格好になっ  
てしまう。

「ニハオ  
？好」

女性は何故か私に向かってニコニコと笑いながら綺麗な発音の北京語でそう話しかけてくる。

「に、にーはお。」

慌てて答えてから助けを求めようと太刀風先輩に顔を向けるが……いない。周りを見ればキース先輩も霞桜先輩も鴛淵先輩もどこにも見当たらない。

後から視線を感じて振り向けば皆で地下鉄入り口に隠れ……

というか思いつきりはみ出ているので隠れられていないのだけど

……

とにかく地下鉄入り口のにしゃがみこみ通行の方々の邪魔をしな  
がら、口々に小声で何か言ってくる。勿論内容は聞こえないけど、  
何となくこの3ヶ月での事からで想像はつく。

多分「頑張れッ」とか「負けるなッ」とか、拳句の果てには「押し倒せッ」とか言ってるんだろう。

助けて貰えられそうに無い事に少しへこみながら中国系美人に顔を向けるとニコニコと笑みを浮かべたまま早口に何か日本語じゃない言語でまくし立てられるが、分かる筈がない。

こんな事なら必修の第二外国語で中国語を取っとけば良かった……

……なんて一瞬の混乱の為に一年の苦行を得てしまうような馬鹿な事を思ったりしたけど、今はそれどころじゃない。

少し冷静になろう。

私の知っている中国語は？

ウォーアイニー

「我愛？」

和訳すると（愛しています）この場面で言ったら只の罵詈だ。この美人のお姉さんが太刀風先輩と同じ属性というか嗜好の人だったら洒落にならない……かもしれない。

ウォーダーアイレン

「我的愛人」

和訳すると（愛しい人）

同じだッ！

思わず自分に突っ込んだ。

「えーとですね、その……アイ、キャント、スピーク、チャイニーズ……」

幾ら考えても単語しか浮ばず、必死の思いでそれだけ怪しい英語を言った私の思いは天に通じた。

「あー、そうでしたか。私、少し日本語出来ます。」

……助かった。

というか日本語できるなら始めから話してよ……

腰が砕けそうになる私にお姉さんの笑顔が眩しい。

「何だ、日本語話せるじゃないの」

その声に振り向くと何時の間に来たのか太刀風先輩が腕を組んで偉そうに立っている。

「いや、面白い見世物やった。」

霞桜先輩が相変わらずのミュートが掛かったトランペットのような妙な声で言い、キース先輩鷺淵先輩がうんうんと頷く。

先輩、もっと早く出てきて下さい。

非難がチヨモランマより高く積もった私の視線も気にせず、太刀風先輩がお姉さんに問い掛けている。

「それで、何かご用？」

その言葉にお姉さんが少し眉を顰めて尋ねてくる。

「えと、私時計無い、何時？」

「……………多分コレは「私は時計を持っていません、今何時ですか？」と聞きたいのだろう。」

しかし……………私は思わず上を、お姉さんの頭上を見上げた。

そこにはビルの電光掲示板に設置された巨大なデジタル時計。だが、ここでアレを指し示す事は簡単だけど、折角聞いてきたのだから教えて上げよう。

「今は8時20分ですよ。」



私の言葉にお姉さんの顔が曇る。

「コラッ虚祁、お前何を言った?!」

「なっ何も言ってますんよッ!っていうか可愛い後輩が困っている時はさっさと隠れたのにこのお姉さんに対してはそういう態度を取るってあんまりじゃないですかッ!？」

「可愛くないッ!」

断言された…………

「否、言いなおしたる。お前は一般レベルから見たら十分可愛い、美人の部類に入る事は間違い無いやろ。しかしや、それも時と状況と場合によるんや、オマエがこのお姉さんより美人やったらちゃんとオマエの肩持ったるわ、即ちオマエの美に対する修行がたりんッ!」

ビシッと私に指を付きつけながら霞桜先輩は堂々と言い放ち、キース、鴛淵両先輩はまたもウンウンと頷いている。男って酷い。

「ちょっと、それは言い過ぎよ。」

「太刀風先輩…………」

すいません太刀風先輩、多淫症だとかイツちゃってるだとか、妄想癖だとか前世女だとか思っ……………もう絶対……………いや多分……………それなり……………ま、アレです。思考は自由ですしね。

「確かに優月は美に対する修行が足りないけど、でもそれを補って

余りある……………」

と太刀風先輩が私をゆつくりと上から下まで舐める様に見た後お姉さんの方をまた上から下まで舐める様に見てからもう一度私を上から下まで舐める様に見て一言。

「……………まあ、あれかしら。今回はカスミンの言い分の勝ちね。」

……………泣いてやるーかな。

そんな私達を美人のお姉さんがニコニコと見ている。

「皆さん、とても仲が良さそう。」

……………いえ、否定はしませんよ。本格的に人間関係にヒビが入ってればこんな軽口叩けませんから。

お姉さんに話しかけられた事を切っ掛けに美に対する問答は取りあえずお開きになったようだった。

「どうしたの、誰かと待ち合わせ？」

太刀風先輩が取り繕う様にお姉さんに問い掛けると途端にお姉さんが嬉しそうな顔を浮かべ「ハイ」と言う。

それにしても、遠目に見たときは何だか美人でも陰の気が漂うような人だと思ったのにこうやって近くで見ると儚げではあるものの陰なんて欠片もない人だ。

「もしかして恋人とか？」

その言葉にお姉さんは頬を赤らめ俯きコクリと一つ頷いた。

……………どうでも良いけどこんな仕草が嫌味無く似合う人からは美

人税とか徴収するべきだと思う。でも徴収されなかったらそれもそれで悲しい。

「私、名前、リーホア言います。実は恋人に結婚ノ準備出来タ、来てほしい、言ワレテ……………」

とまた頬を赤らめ俯く。

それにしてもこんな美人のお姉さんを待たすなんて誰だか知らないけどその男良い度胸だ。

そんな考えは先輩方も同じだったらしく霞桜先輩は明らかに憤慨している。鼻息が荒いから間違いない。そして怒りのあまり口から炎でも吐き出しそうな太刀風先輩をキース先輩と鴛淵先輩がどうとうと馬でも宥める様に宥め「アタシは馬かッ！」と蹴られている。ピンヒールブーツだから絶対痛い。

傍から見たらさぞ異様な集団だろう。

あんまり客観的に自分達の姿を考えると逃げたくなりそうなので出来るだけ考えない様にしておいてリーホアさんに話しかける。

「あの、リーホアさんの恋人ってどんな人なんですか？」

「聞いてくれますか！」

嬉しそうにリーホアさんが目を輝かせた。

何て言うか可愛い人だ。私が男だったら放っておかないだろうと思う。

「格好良い人デス。何時モ黒い服を着ていて、本沢山読んでいます。」

…………… 本沢山読んでいて、黒服ねえ。

先輩方と顔を見合わせると皆微妙な表情、一人物凄く見知った人物でそういうのが一人いる。というか玖韻先輩だ。そう言えば玖韻先輩も遅い。もう8時半を越えている。

「ソレニ料理作るの好きデス、胡弓も演奏してくれマシタ。」

先輩方と私の顔が益々微妙な物になって行く。

料理も、胡弓に限らず弦楽器演奏も数ある玖韻先輩の特技の中でも十八番だ。

「アノ人に見詰められただけで私モウ体ガ熱クテ、思イ出シタダケデモ……アン」

「ちょ、ちよつと！」

私は何の因果で朝から身悶えする美人の中国系お姉さんを止めているんだろう？

そんな事を考えながら慌ててお姉さんを止める。

「ヤダ……ハシタ無イ」

お姉さんの顔が益々赤く染まり俯く。

太刀風先輩はもうメロメロだ。お姉さんに「死んで」とか言われたら自分で息を止めて窒息死するぐらいの事をやってのけると思う。逆に「殺して」なんて要求されよう物ならマァーどこるかエリミネイターになる事ほぼ確定。

「あの、その人何て名前何ですか？」

その質問に先輩方の視線が集まる。

「ハイ、あの人ハ……」

「あの人ハ？」

「…………… クククク…………… ハハハハハハハハハハッ」

と突然天下の往来にも関わらずお姉さんは笑い出した。  
私達は呆氣に取られる。

何がおかしいのかお姉さんはトランクをばしばし叩きながらまだ笑うのを止めない。とその時「あーッ！！」と太刀風先輩が大声を上げ何事かと顔を向けると口元を押さえ、目を見開きながら震える手をリーホアさんに向け一言。

「…………… まさか、玖韻先輩？！」

？

何故か太刀風先輩はリーホアさんを指差して玖韻先輩と言っている。

つまり、玖韻先輩「リーホアさんと太刀風先輩は認識した。

うん、この人駄目だ。前々から少々イッちゃった先輩だとは思っていたけど、とうとう一線を越えてしまったらしい。

「…………… 太刀風先輩、私雀医者とか紐医者しかいないけど取りあえず看板は精神科の病院知ってますから……」

そんな台詞を口に出した時。

無理矢理笑いを押さえながらリーホアさんが言った言葉に私達は再び目が点になった。

「フフ、君らもう少し洞察力を磨くべきだね。」

私も含む五人が涙まで浮かべて笑うリーホアさんを凝視する。

「ちよいと、まだ分らないの？」

分からないも何も悪い冗談としか思えない。現に声も完全に女性の声だ。

「そっか、声戻さんとなあ」

と言いながらリーホアさんが首に手をやり二回程コキコキと鳴らす。

「ほら、コレで信用しただろ？いや、中々面白かった。ゆづの狼狽具合とかゆづの狼狽具合とかゆづの狼狽具合とかな。」

「全部私じゃないですかッ！て、そんな事より本当に玖韻先輩なんですか？！」

「だからそう言ってるだろ、まったく先輩を信用しないなんて悪い後輩だねえ。玲音哀しい！」

と完全に何時もの声に戻ったかと思いきや、またさっきとは違う女の子の声になって玖韻先輩が私の頭をぐりぐりとやってきていた。

「…………えーと…………な…………玖韻、言いたい事は色々ある。」

目が点の状態から漸く戻った霞桜先輩が口を開く。

そうだ、言いたい事は山ほどある。これには皆同じ意見だったのか太刀風先輩と私も続いてうんうんと頷く。

ずいっと音が聞こえそうな威圧感と共に霞桜先輩が一步前に出る。そして一言。

「何も言わず俺と結婚しいひん？」

私達は駅前で盛大にこけ、霞桜先輩の頬には玖韻先輩の幻の右が入っていた。

第一幕　そうだ、旅行に行こう？（前書き）

長野県に関しては何も含んでいませんよ？



## 第一幕 そうだ、旅行に行こう？

その後、列車の時間が迫っていると玖韻先輩に告げられ、急いで新幹線に乗りこみ（それでも駅弁とアルコールは買い込む）平日の所為もあつてか空いている席を適当に陣取ると座り込み早速ビールを一缶空にした所で漸く玖韻先輩が今日の格好の理由を語り始めた。

その理由とは。

昨日の夜、李紅蘭特集をテレビでやっていたから。

その答えに何やら疲れた私は取りあえず眠る事にした。

夢の中でチャイナドレス姿の玖韻先輩に襲われたが、悪夢と直ぐに認識できない自分に少し危機感を覚えたり覚えなかったり。

さて、私達が目指す長野県は結構遠い。まあ九州から本州のほぼ中央まで行くのだから当たり前前の話でもある。

生憎九州からの直通便は無い為、名古屋で乗り換えとなった。

名古屋でもチャイナドレス姿の玖韻先輩は目立ちに目立っている……いやちよつと待てよ。改めて今日のメンバー全員の服装を見てみよう。

玖韻先輩は省略。霞桜先輩も省略。

キース先輩。

B級洋画に出てくる胡散臭い博士みたいな緩くカールした砂色の金髪は後頭部の高い位置で結わえてサムライ風。よく一般的なイメージで伝えられる天草四郎時貞みたいな髪型だ、月代は剃ってない。高い鼻に緑色の垂れ目。物凄く善人的な顔なのに、格好ときたら白地に南無阿弥陀仏と墨痕隆々と書かれた着流し。足は草鞋。頭には菅笠。腰には刀の代わりに鉄扇。

イイ感じに日本を誤解した典型的外国人。念入りな事に荷物は正絹かどうか知らないけど風呂敷包み。唐草模様が目に染みる。

太刀風先輩。

斑なく染めた赤い髪（地毛という噂もある）、サイバーなダークレッドのサングラス。どこから手に入ってきたのか首を捻りたくなる露出度が異様に高い闇赤色のサービスにも程がある、タイトな露出狂予備軍的レザージャケット。胸元は大きく開き。ルビーが煌くシルバーのボディピアスが光るお臍も丸だし。水着に近いほどの露出度。

でも、夏なのにレザー……いや、いいんですけどね。

そして服には違いなけれど。ローライズにも程がありダメージにも程があるダメージジーンズ。アンダーヘアが見えないのが不思議だ。剃っているのかも。下着が見えないのも不思議だ……まさか、穿いてないんですか？

捕まるのもそう遠い日じゃないかもしれない。

そして踵の高いコレも同色の編み上げブーツ。

何時も通りの格好。

つまり普段着<sup>ふだんぎ</sup>。

……この人病気だ。

気を取り直して鴛淵先輩。

清潔感漂うシンプルなスラックスとアロハシャツ。ただし上下共々赤と黒の市松模様。被っているハンチングも同じ柄。履いている靴までもが同じ柄。良く見れば眼鏡のフレームや時計のベルトに文字盤まで……

この人も病気だ。

見ていると目がチカチカする。

柔和な顔と余りにも似合わない。

っていつかこの格好で先輩達の中じゃ一番地味って……

……訂正します、私以外全員目立っています。せめてここが真夜中のサーカスとか深夜の摩天楼とかハロウィンパーティーとか

だったら違う意味で違和感ないかもしれないけど、ここはお昼の名古屋駅。夏の日差しが爽やかを通り越して鬱陶しい夏の名古屋駅8番ホーム。

今すぐこの場から逃げ出したい衝動に駆られるけど、何故か私の固有スキル直感が逃げたら危険と訴えかけてくるので踏みとどまっている。

「皆さん、発車時刻までもう暫くありますし、折角名古屋なのだからきしめんでも食べませんか？」

鴛淵先輩の実用的な意見に皆で賛成してきしめんを齧る。格好はともかく言う事は実に実用的だ。

それにしても……隣で油揚げの浮いたきしめんを齧る玖韻先輩を見てみる。上下は無理としても四方八方何処から見ても一分の隙なく女性だ。外見だけじゃなくて仕草や雰囲気もといった抽象的な物も完全に女性だ。

実は男性ですといって信用する人は……人じゃないんだと思う。しかしそれ以上に気になるのが玖韻先輩の隣の巨大な古びた外見の黒いトランク。マリオネットでも入っているのかもしれない。

玖韻先輩なら「あるかあん!!」とか言いながら人形を出しても不思議じゃない。

「おい玖韻、ここから長野までどれくらいなんや？」

既に一杯目のタヌキを食べ終え二杯目の月見に入った霞桜先輩がそう尋ねる。時間はお昼時なのに先輩方のお陰で店内が妙に空いてる。店からすれば良い迷惑だ。

「そうね、後二時間半って所かしら？カザは長野には言った事無いの？」

因みにこの格好で地声は趣味に反すると今は女性の声になっている。これも玖韻先輩の特技の一つらしい。聞いた話だと女性の声だけ何通りも出きるそう。男性の声もできない事は無いが、あまり低い声はそもそも出ないそう。

どうでも良いけど霞桜先輩と玖韻先輩が並ぶとく中国系ヤクザとその愛人やいは似てないその娘>って感じた。その上私を挟まないで隣にキース、鴛淵、太刀風3先輩が立とうものなら戦隊モノの悪役幹部勢ぞろいって感じになる。

このインパクトに勝てるヒーローは中々いない。

もつとも悪役って大抵正義のヒーローなんてのよりインパクトが強い気がしないでもない。

「ああ、俺は京都より東に行った事がないねん。」

「そうなの？、長野って良い所よ、大きく中信、南信、北信の三つに分かれていてね、皆でそれぞれの地区を馬鹿にしあって足を引っ張り合っているの。」

玖韻先輩の話聞いても何処が良い所なのかサッパリわからない。

「しかもね、国宝に指定されている松本城は農民の呪いで、天守閣が傾いたお城なの。コレは実話よ、明治時代まで傾いたままでちゃんと証拠写真も残っているもの。」

……益々良さが分からない。

もつともそういう話が好きな鴛淵先輩は目を輝かせている。

そう、鴛淵先輩は怪奇収集という嫌な趣味がある。

そのラインナップも恐ろしい。

人魚や河童の木乃伊なんてキワモノからはじまって、霊が振り向

くビデオとか絞首刑に使われたロープ。磔刑たっけいに使われた釘、京都の某水神を祭る神社から盗って来た使用済み藁人形。

どこまで本当か分からないようなアイテムがごっそりと鴛淵先輩の部屋にはあるらしい。

将来の夢もイギリスはマン島の怪奇博物館を越える怪奇博物館館長。

応援はしません。

さて、きしめんも食べ終えて今度は特急に乗り込むと再び席はガラガラ。お陰で長野県は松本市まで私達はのんびりゆったり快適に行けたのだった。

## 第一幕 忘我邸一日目？

ゴトゴト

凸凹道を走っているのであろう振動がお尻の下から伝わってくる。

「フロイデ・シェーネル・ゲッテルフルケン……」

前の席からは陽気に第九を歌う玖音先輩と霞桜先輩の声が聞こえてくる。外見は全く正反対の二人なのに趣味嗜好が合うらしい。

「……先輩、私達ドコに行くんですか？」

「日本国内じゃないかしら？」

「ソーデス、バンバンジー細胞は馬と古来の人も言ってます。」

それは万事塞翁<sup>さいおう</sup>が馬です。

そもそもバンバンジー細胞って何ですか？

ランゲルハンス島の親戚か何かですか？

そんなツツコミをキース先輩にする気力も湧かなかった。

今の私達の状況を簡単に言うのなら、護送中の犯人だ。

松本駅を出た私達を待っていたのは一台のマイクロバス。

柔和な笑みと張りついた笑みの中間点を浮かべた壮年の運転手さんに言われるままにバスに乗った後、渡されたのはアイマスクと手錠。

アイマスクと手錠を装着された後バスは出発しかれこれ一時間が経とうとしている。

「ほら、まだ本格的にオープンしてないしそれに運転手サン視線恐怖症やから。」

と理由になっているようなないような説明を受けて私達はバスに揺られている。というかそんな人物を迎えに寄越すな。

「玖韻先輩……まだ掛かるんですか？」

「もう直ぐだよ、ねえ運転手サン？」

「はい、勿論でございます。どうか皆様あと暫く」

と、バスが止まった。

「皆様、到着致しました。」

……色々言いたい事は在るけど黙っておこう。

バスから降りて手錠を外してもらい、アイマスクを外した私達は絶句していた。

「皆様、ここからは徒歩になります。」

笑みを含む運転手サンの声を聞いても私達はやっぱり絶句していた。

視界に入る限り森が広がりその中に一本細い道が見える。その森も爽やかさとか明るさなんて言葉とはかけ離れた森。鬱蒼としたと  
いんいんめつめつ  
か陰陰滅滅なんて形容詞が相応しい森だ。

「あの、玖韻先輩？」

「どうかしたの？」

「一体僕等はどこに向かっているのかもう一度説明して頂けますか？」

鴛淵先輩が微妙な笑み、というには少々無理のある表情を浮かべて一人機嫌良さそうな顔の玖韻先輩に尋ねる。

「電車の中でも言ったでしょ、私の従兄弟が経営している純和風旅館（ぼうがてい）＜忘我邸＞まだボケるには早いと思うけど？」

「いや玖韻、今は若年性の急性痴呆症もあるいうからな、案外わからんもんやで？」

霞桜先輩が茶化す。

「そうですね、もしかしたら悪名高いクロイツフェルトヤコブ病かも、（しゅう）楸ちゃん脳味噌スポンジ状なの？変死したら検死解剖の時見せてね。」

さらに太刀風先輩も茶化す。

「OH……ミスター鴛淵、アナタの事は忘れません……三日ハ。」

さらにさらにキース先輩が茶化した後、何故か期待を込めた目で四人が私を見てくる。四人とは言うまでもなく鴛淵先輩と運転手さんを除く四人。

コレは私も後に続いて茶化せと言う事だろうか？

（うかが）  
伺う様に太刀風先輩に目を合わせるとコクコクと頷かれた。  
では一つ私も。



「鴛淵先輩安心してください、元々影が薄いんですからいなくなってもそんなに変化は……あれ？」

笑顔で言っていたものの先輩方のイタタタたという表情に思わず言葉を止めた。

「さて、地雷を踏むというオチがついたトコで歩くのでしょうか。」

玖韻先輩が巨大なトランクをもつともせず細い道を運転手サンの後について歩き出す。

「そつやな、誰かさんが酷い事いうから場が冷めてもうたわ。」

その後に続く霞桜先輩。

「ミス虚祁はジョークのレッスンが必要です……」

手を肩の辺りまで上げ首を左右に振る例のポーズをしながらキース先輩が続く。

「優月、あれはアタシもフォローできないわ……」

慰める様に私の肩を叩いて太刀風先輩も続く。

……そんな、私の言った事ってそんなに酷かったんですか？  
ポンツと後から肩を叩かれる。

嫌な予感を感じながらゆっくり振り向くと、そこにはアルカイックスマイルを浮べる鴛淵先輩の姿。

「虚祁……僕は怒っていないからね……決してよくも人の古傷抉えぐつてくれたなこのクソアマなぶ騷さわって犯して八裂きにして埋めてやろう……」

…何て全くこれっぽっちも思っていないからね。」

いえ……本音でしょそれ？

「あの……先輩、痛いです。」

ギリギリと、鴛淵先輩が虫も殺さぬと言った笑顔のまま目は笑っていないという器用な顔でギリギリと私の肩を掴む。

「でもね、僕のピュアでナイーブな心は虚祁の言葉でマリアナ海溝より深く傷ついたよ、ごめんなさいは？」

ギリギリ

「……先輩、肩甲骨がみしみて……」

「ご・め・ん・な・さ・い・は？」

ニッコリ

ギリギリ

「ごめんなさい先輩、心から謝ります。だから、あの、そろそろ肩から手を離して頂けるとありがたいなあって……」

ふっと肩から圧迫感が消える。

「それじゃ虚祁、僕らも行こうか。待ってくれるような人達じゃないからね。」

始めて逢った時から全く変わらないアルカイツクスマイル。

上機嫌で鼻歌、それもレッドツェッペリンの移民の歌を歌いながら足取りも軽い鷺淵先輩を見ていて私は昔霞桜先輩に聞いた鷺淵先輩のもう一つの名前を思い出していた。

微笑を浮かべし魔人、ゴッドスマイル鷺淵。どれだけ中二だよとか、イタイ人だとか思ったのは内緒だ。

なににせよこの瞬間私の「今年度版怒らせちゃいけない人」に新たに鷺淵先輩は上位ランク入りしたのだった。

因みに上位は全員先輩方だったりする。

## 第一幕 忘我邸一日目？

少々急ぎ足で後を追うこと数分、幸い一本道だったお陰で迷う事もなく追い付き、それから約一時間、私達はしりとりをしながら夏だというのにどこからともなく底冷えしそうな冷氣と濃密に漂う何かの気配を浴びながら今だ一本道を歩いている。

「ハンプティ・ダンプティ」

「胃酸過多」

「た、たた……タキオン通信装置」

「今のは在りか？」

「うゝん公式ルールなら難しいところだけど、今回は良しとしましょう。」

「しりとりは公式ルールがあるんですか？」

「愚問ね、全世界正しいしりとりを広めようの会、会長の友人が言ってるんだから。」

「玖韻先輩それ嘘でしょ？」

「あら、何ではれたのかしら？」

「ばれない方がおかしいと言う物である。」

私の心の中でキートン山田風のナレーションが流れた。

「玖韻……………オマエ俺達を騙していたんか？」

シヨツクを受けたような顔をした霞桜先輩とキース先輩。

おかしい人達はわりとすぐ傍にいました。

こんな馬鹿馬鹿しい会話としりとりを繰り返しながらさらに十分ほど歩いた頃、突如開けた場所に出ると、その建物は静かな威圧感を放ちそこに佇んでいた。

「ここも久しぶりねえ。」

そんな玖韻先輩の独白が聞こえてくる。

この建物の外見を一言で表すならコレほどの確に表した言葉は無いって程の物をキース先輩が呟く。

「OH……………ジャパニーズホーンテッドハウス……………」

つまりは、そういう外見です。

外見から見る限りは純和風建築の屋敷が眼前に広がっている。ただ、異様なのだ。

まず屋根の高さが一定じゃない。尖塔みたいに突出して高い所も在れば低い所もあり、横にも縦にも大きく一点を見ていると蠢いてうごめいるような錯覚が起こりそうになる。異様なのはそれだけじゃない。冠木門かぶきもんを潜った先から屋敷までくすんだ緋色の鳥居が神社の参道かみちみたいだんだん大きくなるよう等間隔建てられている。その上瓦葺かわらぶきの屋根からは真っ赤な細長い布を風も無いのにはためかせる旗が乱立している。旅館と言うよりは邪悪なモノでも奉る神殿のようだ。

「……………崇られたりしないわよね。」

玖韻先輩が日々暮す家屋を数十倍、下手をすれば数百倍悪化させた瘴気とも感じられる気配に流石の太刀風先輩も不安そうに呟く。そんな中。

「これは、素晴らしい!!」

一人感極まった様に鴛淵先輩が大声を上げた。

「シユウ、君はその当たりがよくわかってる。良い感じでしょう？しかも今まで事故死事件死自殺者変死者合わせてもう直ぐ4桁。その上怪奇現象の隠れたメッカと言われていてそのテのマニアには垂涎的なのよ。」

玖韻先輩が胸を張って誇らしげに言い放つ。

そんな情報知りたくありません。

「けど、今回ここには泊まりません。」

「そんな、何故ですか?!」

みんながほっとしたのも束の間、一人喚く鴛淵先輩の首筋に目にも止まらぬ早さで霞桜先輩の手刀が、そして鳩尾にキース先輩の鉄扇がめり込むのを私は見逃さなかった。

「先輩、邪魔者は片付いたので続きをどうぞ。」

白目を向いた鴛淵先輩を何処からともなく………てんびんぼう…本当に何処から出したのか不思議だけど、兎に角出した天秤棒に手と足を縛り付けて霞桜先輩とキース先輩が担いだのを笑顔で見ながら太刀風先輩が

玖韻先輩に報告する。

なんだかいいトコないね、鴛淵先輩。

「別に邪魔でもなかったんだけど、まあいいか。」

軽っ

「そう、それで泊まる所なんだけど

結局のところ玖韻先輩の話しを要約すると、宿泊する所は忘我邸だけど、ココには、この邪悪な神殿チックな屋敷には泊まらないという事だった。

つまりのところ、この屋敷は和風旅館（忘我邸）本館なのだそう  
だ。こちらの方は毎年固定客が（どーゆー客層かはあんまり聞きたくない）いるので別に今更新しい顧客を呼ぶ必要も無いという。そんな訳で私達がタダで泊まれると言うのはこの本館の裏手に新しく出来た忘我邸別館だという事だった。

そして忘我邸別館前、私達は別の意味で呆気に取られていた。

「おい、玖韻」

「なーにカザ？」

「コレが別館か？」

「ええ、私の意見としては少し外見が爽やかすぎて不服なんだけど、別館は若い客獲得の為に造られたものだからしょうがないわね。」

別館の外見を的確にあらわす一言を再びキース先輩の呟きで紹介  
します。

「……………ホーンテッドハウス？」

実に正鵠せいこくを得た一言ですはい。

私の背後に建つのが和風お化け屋敷なら、私の前に建つのは洋風お化け屋敷だ。

玄関は向こうになります。という運転手サンの言葉に錆色の煉瓦壁に沿って歩きながらじっくりと建物を観察してみる。それ程高さは無く多分3階建てのこの建物、六角形を描いて建っている。中心とそれぞれの頂点に尖塔が建っているのが見える。幸い本館ほど邪悪な感じはしない。どちらにしろ何となく妙な雰囲気はするけれど。ところで、気になる事が一つ。

「先輩、ここって新築じゃなかったんですか？」

「ゆづ、誰が新築って言ったの、改築って言ったでしょ。」

はてそうだったかな？

「それにしても改築っていうんならもう少し外見にも気を配れば良かったのにね。」

太刀風先輩が煉瓦壁を触ると触った箇所がボロボロと崩れる。

「やだ、風化が始まってるじゃない。」

「古い建物だから、それもしようがないわね。」

「おい、寝てる間に崩れたりせんやろな？」



「大丈夫よ、見た目はともかく中身は最新鋭の設備で充満している筈だから……それが正しい意味で使われているかどうかはおいておくとしてもね。」

どうにも違和感無さ過ぎて、本当に男なのか疑わしくなってきた玖韻先輩が不穏な事を言う。

「それ、どういう事ですか？」

「あら、楸ちゃん気が付いたの？」

天秤棒からぶら下がったままの鴛淵先輩が笑顔で答える。

「ええ、楽なのでこのまま運んで貰おうと思いましたが話しが面白そうだったので口を挟んでしまいました。」

ハハハと快活に笑う鴛淵先輩。

「ミスタ鴛淵、気が付いたのなら自分で歩いてクダサイ。」

キース先輩が天秤棒を肩から下ろす……というか落とした。

当然鴛淵先輩はまだ縛られたまま。イコールどうなるかと言えば鴛淵先輩は重力に逆らえず頭から落ちる訳で……

ドゴッ

非常に鈍い音が聞こえる。

「どういう意味も何もその通りの意味ね、少し前の事だけど、見えないところにお金を使えって言葉をそのまま素直に解釈して忘我邸の屋根裏と縁の下を全金張りにしようとして旅館潰し掛けたのが今

の忘我邸最高責任者だから……って人に話しを振っというて途中で寝るってどーなのよ！」

玖韻先輩がずるすると霞桜先輩に引き摺られている鴛淵先輩にびしいとツツコミをしている。

「玖韻、コレは気絶しとるんや。」

霞桜先輩が冷静に間違いを正す。

それにしても今日の鴛淵先輩いいトコないなあ。

そんな事を思いながら歩を進めている時だった。

「玲音ちゃん!!」

そんな高い声が聞こえ私の目の前を黒い影が横切ったかと思うとその黒い影は玖韻先輩に飛び掛って行く。そしてギンツという金属のぶつかり合う音。

「レニ姉さん！」

「やだ、玲音ちゃん前会った時より綺麗になったでしょ、お化粧も上手くなったし。もうお姉さん嫉妬しちゃう。」

「そんなに褒めないで、恥かしいわ。」

「恥ずかしがらなくても良いじゃない、私と玲音ちゃんの仲ですもの。」

高い声と共に飛び出てきた人物。玖韻先輩が「レニ姉さん」と呼ぶ人物と玖韻先輩は何故か戦っている。

レニ姉さんとやらは箒で、どう見ても普通の箒だ。多分世界で一番有名なネズミが、電気を出さない方のネズミが魔法で水汲みをさせていたあの箒。それを玖韻先輩は扇で、大きな房飾りが付いた絢爛豪華な扇で受けている。というかその扇何処から出しました？らんこうか

撃ちかかり互いの武器、と呼ぶには貧弱なモノが触れ合うたびに金属音が聞こえ、火花が散るのはもうご愛嬌としてもツツコミどころが多いのは間違い無い。

完全に私達は取り残されている。

その後も聞いている限りでは微笑ましいレズカップルのような会話を続けながらどう見ても本気としか見えない動きで打ち合っている。その動きは素人目に見ても常人の動きとは思えない。けど、そんな事よりもとりあえず玖韻先輩の口調だけでもそろそろどうにかしてほしい。

「……………玲音ちゃん、腕を上げたわね。」

「そついう……………姉さんこそ……………」

二人とも細い所為かスタミナは無いらしく、数分ほどで青息吐息になり互いに抱擁している。

二人の動きが止まったところで改めてレニ姉さんとやらの格好を観察して見る。小柄な身体、服の上からでも細くて華奢なのがわかる。

小さな顔にアイズブルーの瞳、桜色の唇、白銀色のさらさらな髪。年齢はどう見ても15歳が精々。でも、この際そんな可憐で愛らしいにも程がある美少女なんて外見はどうでも良……………くは無いが置いといて、問題はその服装だ。銀色の頭の上に乗った可愛い白い白のヘッドドレス。黒と白のシックなエプロンドレスに箒。その格好は誰が何と言おうがメイドさんだった。少なくとも私はメイドさんだと認識する。

もし金髪だったら名前は絶対にアリスだ。

その手の人には大ダメージ。

私は大丈夫。ちよっと着てみたいとは思っけど。

「……………玖韻、色々聞きたいことは在るんやけど、まず其方こなたは何方どなたや？」

抱擁し会う二人に声を掛けたのはいち早く素に戻ったらしい霞桜先輩だった。その声に抱擁を解き二人が此方を向く。

全世界正しい意味でのミスコン二十代の部、十代の部優勝者二名。そんな言葉が頭を過るが、一人は男性だと言うことを忘れてはいけない。

「始めまして、何時も玲音ちゃんがお世話になってます。」

ぺこりと可愛らしくレニ姉さんが頭を……………姉さん？

「私、忘我邸総責任者レニエル・オルフェウスと申します。」

私の疑問はおいとくとして、嫌な予感を覚えつつ太刀風先輩に目を移す。そこには予想通り肉食獣の笑みを浮かべ涎を垂らしかねない太刀風先輩の姿。

「先ほどはお恥ずかしい所をお見せしました、玲音ちゃんに会うのは久しぶりだったので私ったらつい……………」

ほんのり桜色に染まった頬に手を沿えもじもじとする。

その物理的な破壊力すら生まれそうなまでの可愛さに太刀風先輩は暴発寸前だ。

「さ、皆様こちらへどうぞ、忘我邸全従業員皆様方を歓迎致します。

」

レニエルさんが万面の笑みを浮かべる。

我慢できなくなったのであるう太刀風先輩が飛びかかり、比喻でも何でも無く言葉通り飛びかかり、玖韻先輩に空中で撃墜されたのは数秒後の事だった。

容赦無い。

## 第一幕 忘我邸一日目？

コツコツ

私の歩調に合わせて足の下から硬い音が聞こえてくる。

音を立てているのは私の履いている靴の裏とびつちりと敷き詰められた御影石、というよりも黒曜石みたいな石のパネルとが打ち鳴らされる音。石のパネルがひとりでに鳴ると言うことはそうそう無い。ということは音を立てているのは歩いている私であってそれはつまり私の歩くと言う行動が音を立てているのだから、私の歩くという意思が音を立てているとまで思うのは果たして行き過ぎだろうか？

「行き過ぎね。」

突然後からのツツコミに私は震えあがる、遠ざかる、降りむくを一度にやろうとしてその場で転ぶ。一応受身は取れたけど恥ずかしいことに間違いはない。

「たつ太刀風先輩何時来たんですか！？」

玖韻先輩に撃墜されてからココの従業員さん達に運ばれてベッドで延びていた筈の太刀風先輩がそこに腕を組んで立っていた。

着替えたらしくあの露出狂予備軍敵なレザージャケットは着てない物の、今着ている服も真つ当な服を一端バラバラにした後意図的に大部分取り去り再統合したような変態一步手前、服何だか布何だか判断に困る。これじゃあさっきのレザージャケットとどっちがましか悩まさせてくれる格好だ。

「あら、愛しい優月のいる所海の底だろーがこの世の果てだろーがアルデバラン星団だろーがアタシがいはいはずないでしょ」

なんかウインクしながらポーズを取って言うてくる。

嫌になる程似合っているけどこんな服装が問題無く似合っているのはそれだけで問題な気がする。

「……先輩、それ答えになってませんよ。」

「所で優月は何してるの、確か夕食は七時からだって聞いたけど。」

私の疑問は全くムシ。わかっている。こーゆー人なのだ。だから一々突つかかれば疲れるのは間違い無くこっちなのは痛いほどに経験済みだけどそれでも何か言いたくなるのは私の業ごうだ。そんなに重くも無いが。

「……ちょっと中を見て周っていたんです。」

「ふーん、アタシも一緒に行って良いでしょ？」

慌てて周りを見まわす。幸い周りには従業員の方々が何人もいる。暗がりとかに近づかない限りは押し倒される心配もないだろう。

「ええ、いいですよ。」

ニツコリ笑って答える。

「……………なんか気になるわね今の間が」

対照的に太刀風先輩は渋い顔をしているが、気にしない気にしない。

「あれっ？　そういえば先輩さっき私の考えていた事にツツコンできませんでしたか……？」

そう、私は声に出して足音の考察をしていなかった筈だ、なのに先輩は確かにツツコミをした。

「そう？　気のせいよ、気・の・せ・い。」

絶対に気のせいじゃない気がする。

心のメモ帳二十五頁太刀風先輩の欄に新たに一項目「NEW！サトリかもしれない。」が追加された。

今私が歩いている所は一階のホールに繋がる廊下の一つだ。このホテルは何だか面白い造りをしている。

まずこの建物、忘我邸別館。正式名称「眩暈館」めまいかんは真上から見ると正六角形を描いており地下1階2階を含めると5階建ての建物である。そして、角の部分が部屋になっていて宿泊できる部屋は1階と2階の壹號室から拾貳號室までの12部屋だけ。3階はさっき上がってみたら空中庭園になっており部屋がある部分はそれぞれ赴きの違う花壇と簡単な休憩所になっていた。天井は透き通った硬質硝子、かアクリル。

それは兎も角として面倒臭い造りをしている。

各階を結ぶ階段は中央ホールに設けられた螺旋階段一つだけ。そしてこの中央ホールをぐるりと囲う様に六角形を描く第一廊下。

その周りを1階2階とも食堂や遊技場といった各施設が囲みさらにその周りを囲う様に第二廊下。そしてその第二廊下を挟み大三廊下がそれぞれ客室に通じている。

こう言えばあんまりややこしい作りには見えないかも知れない。



でも実際はややこしいのだ。何故かと言えばまず1階。入り口は中央ホールにある。つまりこの眩暈館に入るには一端地下に潜り螺旋階段を上がって1階に入る事になる。そして円形の中央ホールから第一廊下への通用口は北側と南側の二箇所。そして六角形を描く第一廊下からは北側と南側を除く4箇所が通用口、それぞれの通用口が各施設に直接繋がっていて第二廊下へ出るにはどこか施設を通るしかない。因みに1階の施設はまず多目的ホール、レストラン、ビリヤード場、カウンターバーの四つ。

さて第二廊下がまた面倒臭い。それぞれ施設から出られる或いは入られるつまり第二廊下への入り口は四箇所あるけど、第三廊下への入り口は北側一箇所にしかない。そしてその北側通用口を抜けると目の前に壹イチと大きく書かれたドアが現れる。六角形の、眩暈館の頂点の一つであり、壹號室いちごうしつのドアの真正面に当たる。そして第三廊下はそれぞれ客室と客室の間を遮る様にドアが立っている。そして何故かこのドアは一方通行なのだ。

どういう仕掛けかはわからないけど壹號室を基点として右回りには進めない。だから貳號室にふごうしつの人間が壹號室、或いは第二廊下へ行く為には一端參號室さんごうしつ、肆號室しごうしつ、伍號室ごごうしつ、陸號室ろくごうしつの前を通り壹號室の前まで来ないと駄目なわけだ。

2階も基本的に同じ造りだけど、2階の第三廊下は構造が逆になっ  
ていて第三廊下の入り口は南側にあり……少々面倒な話なのだけれど、つまり一階肆號室の上が陸號室にあたり、そこを基点として逆時計回りに一方通行になっている。

地下1階に限っては何だか単純で螺旋階段を降りて南側に出れば眩暈館出口へ、北側に出れば大浴場へ繋がっている。災害時の想定とかバリアフリーとか一切気持ち良い程に無視した人に厳しい設計だ。

で、今私と太刀風先輩は1階の第二廊下を歩いている。

「それにしてもややこしい造りよね、内装も同じだから本当に眩暈

起こしそう。」

「そうですね、何だか同じ所を堂堂廻りしているみたいで、昔出掛けた栄螺堂えいろうどうを思い出しました。」

太刀風先輩に「渋いわね」と肩を竦められた。

「ねえ優月、晩御飯までまだもう少し時間があるんだけど、ナインボールでもやらない？」

ビリヤード室の前を通りかかったのを良い事に太刀風先輩がキューで球を付く仕草を試みせる。

「良いですよ、一勝負やりましょうか。」

早速二人でビリヤード室に入る。スポットライトのオレンジ色の光だけで照らされた室内に重厚な外見のビリヤード台が4台静かに鎮座している。カウンターに向かいメイド服の従業員さんに話しかけてキューと球を借りてくる。

それを手馴れた仕草で太刀風先輩が並べ、ブレイクショットをするかと思いきや、手を止める。

「優月、折角だから賭けない？」

「賭けません。」

艶つぽくもあり色つぽくもある太刀風先輩の笑顔に恐怖を覚え即刻断る。が、それをムシして太刀風先輩が言葉を続ける。

「じゃあ優月が勝ったら優月が前から欲しがっていた裸石はだいしのセット

買ってあげる。」

うッ

弱い所をついてくる。

「……………太刀風先輩が勝った場合は？」

ニヤリと物凄く悪い笑みを浮かべる。

「今日はね、朝から女装した玖韻先輩見たり、レニチャン見たりしちゃったから血が滾ってるのよね。」

妙に真っ赤な舌が唇を舐める。

背中に戦慄とも恐怖ともとれるモノが走る。

「……………つまり……………それは……………」

遠まわしに夜の相手をしると。

頭の中に天秤が浮ぶ。片方のお皿には裸石<sup>るす</sup>セット。出物のロイヤルブルームーンストーン、レインボームーンストーン、カボツションカットを施されたスターサファイアとスタールビー。もう片方のお皿には裸の私。

さあ考えよう。私達のメンバーでビリヤードをしに出掛けた事は何度かある。その際当然太刀風先輩もゲームに加わるが、そんなに上手じゃなかった筈だ。私とサシで勝負して大体4対6ぐらいで私が勝っている。

そんな情報を天秤に加味しながらしばし揺れ動いた結果。

「……………分かりました、その賭け受けます。」

私がそう答えた時の太刀風先輩の笑みをなんと表現したらいいだろう。それはまさしくヘカテかヘラか、はたまたバビロンの大淫婦かそれともリリスか、そんな笑みだった。

「……………因みに先輩、レニちゃんってもしかして？」

「ええ、レニエル・オルフェウスさんの事よ。でもあの外見で二十歳って詐欺よねえ？」

華麗にブレイクショットを決め、いきなり全ての球を落とし艶然と笑みを浮かべる太刀風先輩。

私はレニエルさんより太刀風先輩の腕前の方が詐欺だと思っています。教訓、人間モノが掛かると強い。

## 第一幕 忘我邸一日目？

「そういえば先輩？」

「何かしら？」

どうやら先輩がツいていたのは最初だけだったらしくゲームを重ねるたびに腕は落ち、最終戦を終え辛うじて引き分けに持ち込みほつと一息つきながら私達は休憩していた。

「ずっと気になっていたんですけど、今日の朝どうしてリーホアさんが玖韻先輩だつて気が付いたんです？」

今時見かけない長細いタイプの缶に入ったオレンジジュースを飲んでいた先輩が此方に顔を向ける。

「あれ？……そうね、普通に教えちゃったらつまらないからヒントを上げる。」

と言つてから私の顔を暫く見て一言。

「優月、来週中に生理が来るでしょ。」

「……………何で知ってるんですか？」

誰にも教えた覚えはない。そもそもそう言う事を教えるような相手なんて私にはいた事がない。

「知ってるっていうのは正しくないわね、アタシには分かるの。」

どういう事だろう、知っているとか私から聞いたとかなら兎も角分かるというのは……もしかして女性の生理がわかるという特技だろうか？……何だか末期的な特技だけど例えそうだとしたら今日の朝玖韻先輩を見破った事のヒントにならない。

「……もしかして、何で先輩が私の生理が来週かってわかる事が、だからそのわかる理由がヒントって事ですか？」

「優月賢い！」

撫でられた。

「ちょちよつと止めてくださいッ恥かしいじゃないですかッ！」

「良いじゃない、恥かしがることなんて無いわよ。ねえ？」

カウンターの向こうでキューを磨いていたメイド姿の従業員さんに太刀風先輩が同意を求める。

笑顔で頷いているが、少し苦笑混じりなのを私は見逃さない。

「それとも優月は撫でられるの嫌い？」

「……いえ、決して嫌いと言う訳じゃ………」

「じゃあ良いじゃない。」

撫で撫で撫で撫で撫で撫で撫で撫で撫で撫で。

猛烈に撫でられる、嘘でも嫌いって言った方が良かったかもしれ

ない。

…………決して悪い気はしないけど、素直に認めるのは拒否する。

「で、優月答えはわかった？」

たつぷり五分は撫でられてから太刀風先輩が満足したのか何だかツヤツヤしながらそう聞いてくる。

「わかりません。」

「……………少しは考えた？」

「すいません、考えなくても答えがわかりそうな時は考えない事にしてるんです。」

うーん他力本願。

「アタシとしてはその脳の温度が上がりそうな考え方はどうかと思うけど…………まあ良いわじゃあ種明かしね。」

とネイルアートの施された指先で自分の鼻を指し示す。

「コレはちょっと傲慢なんだけどアタシ物凄く鼻が利くの。」

「鼻ですか？」

「そう、今朝の玖韻先輩の変装は確かに見事だったけど流石に自分の匂いまでは変えられないもの、香水で誤魔化していたけど、ほら大笑いしたでしょあの時にね、気が付いたのよ。」

「……………玖韻先輩香水なんてしてましたか？」

「それも分からなかったの？<sup>ミルラ</sup>没薬に各種スパイス、後はジャスミンとかイランイラン辺りが感じ取れたからオピウムじゃないかしら。」

「でも何で笑った時に玖韻先輩だって分かったんですか？」

「そうね、優月嘘発見器は知ってる？」

「嘘発見器ってあの身体に電極みたいなものくっ付けて質問するとグラフが動いて嘘かどうかわかるアレですか？」

「そうそう、じゃあ嘘発見器がどうやって嘘かどうか見分けるのか分かる？」

「……………知りません。」

「浅学ね。」

「ほっとして下さい。」

「では、浅学な優月に太刀風凧なこと、なぎりんが説明して上げましょう。」

と同じ女性として劣等感を抱きそうになる胸を張る。

それはともかくいい加減「なぎりん」って今時<sup>ガキ</sup>小学校低学年だつて嫌がりそうな一人称がイタイと思うけど黙っておこう。

「嘘発見器の一番始めは古代日本で行われていた（クガタチ）かしら、漢字で書いたら（盟神探湯）沸騰させたお湯の中に勾玉を落と



して罪人と思わしき人物に拾わせる。無事拾えたらそれは神様が認めたと言う事で無罪。もし火傷をすれば有罪。まあコレは中世の魔女裁判に少し通じる物があるかもしれないわね、手足を縛って水に落として浮び上がったら魔女だから火刑。沈んで溺死したら人間だったってね。要は今と逆で疑わしきは罰しろって考えだったのよ。

では、科学的根拠の嘘発見器の歴史はといえば、まず1921年に遡るの。当時のアメリカはフォーダム大学でウィリアム・マーズトン教授が嘘は血圧に影響すると言う理論を発表。これを読んだカリフォルニア州警察のオーガスト・ヴォルマー本部長は血圧測定器を利用した嘘発見器を造らせた所、自分で実験台になって実験してみたら小さな動揺にも反応し嘘を見破る結果となったワケ。関係無いけどオーガストって名前聞くとオーガスト・ダーレスの方を思い出さない？

それは兎も角、コレが一応嘘発見器第一号とされているハイドロフィモグラフ。当時結構話題になってそれを見た犯罪者が偽証するだけ無駄だと悟って白状したなんて話も残ってるくらいだから。」

怒涛の勢いで太刀風先輩の口から嘘発見器の歴史が流れ出る。それにしてもオーガスト・ダーレスって誰だろう？

「その後改良されて、血圧の他に脈拍、呼吸速度、発汗量も同時に測定できるようにしたカーディオ・ニュモ・サイコグラムが使われる様になったの。只、弱点もあってね、長時間尋問すると血圧や脈拍を左右するアドレナリンが分泌されなくなって反応を示さなくなるから一回の使用時間は3分までとなったのよ。個人的意見としては嘘発見器なんて使う時点で基本的な人権なんて無視してるような気がするし、そもそも犯罪者に人権なんてないんだから自白剤でも拷問でもやった方が手っ取り早い気がするけどね。」

心なし乱暴な言葉で太刀風先輩が話を締め括る。

「……………何でそんな事に詳しいんです？」

「何言ってるの、一般常識よ。」

「何処の世界の一般ですか……………」

「あえて言うなら第3世界だけど、いいじゃない、そんな事どうでも。それで、結局嘘発見器の基本的概念は不随意の身体の反応を測定し、被験者の恐怖、ストレス、覚醒を判定、分析する物で今のモノは多重センサーシステムを使ってGSRを測定するの。」

「GSRって何ですか？」

「galvanic skin response ガルバニックスキンレスポンス 和訳すると電気性皮膚反射。理科の実験で習わなかった？蛙の足の筋肉にメスで触れるとピクピク動いたりするの、アレの事よ。」

「……………本当に詳しいですね。」

「因みに江戸時代のお庭番も似たような詰問方法を採用したそうよ。」

「お庭番って吉宗さんの所のアレですか？」

「……………ご近所さんみたいな言い方ね、まあそうよ、そのお庭番。捕らえた間者の全身の関節を外して、四肢に紐を結びそれぞれが一人づつが紐を持ったら準備完了。後は質問すると不随意筋が反応してその反応具合で真偽を確かめたとか。」

「中々えげつないですね。」

「そうかしら、敵に情けを掛けるなんて百害あって一利無しよ。見<sup>サイ</sup>的<sup>チ</sup>必滅素晴らしい言葉ね。」

この人真顔で何言ってるんだろ……

「話を戻すけど、このGSRは被験者が何か反応を起こせば如実に変化を示す。その反応から事の真偽を見るわけね。最後に嘘発見器<sup>ポリグラフ</sup>の正式な名称は多現象同時記憶装置。試験に出すから。」

試験するんですか?!

「それにしても、本当に詳しいんですね。」

「だって造った事があるもの。」

……はい?

「先輩、そんな簡単に造れるものなんですか?」

「基本理念を理解して知識があつてお金と技術があれば以外と簡単よ、ほら、アタシ専攻が機械工学と心理学でしょ、レポートに必要で造ったのよ。」

随分軽く言ってるけど、もしかして太刀風先輩って物凄い事をしているんじゃないだろうか?こんな露出狂みたいな格好してるけど、人って本当に外見で判断しちゃいけない。

「何だか今の説明を聞く限りだと、嘘発見器っていうのは自分でも意識する事や制御できないような反応を感じとって測定して嘘かど

うかを判断する機械って事なんですよね？」

「そうそう、優月も中々理解力あるじゃない。」

また撫でてこようとする先輩の手を避けながらふと思った事を聞いてみる。

「それじゃあどんな人であろうと嘘発見器に掛かれば嘘は見破られるんですか？」

「……………確かに大抵の人はそうだろうけど、中にはいるのよ嘘発見器でも嘘が見破れない人が。」

「そんな人がいるんですか!？」

「というかそもそも嘘発見器ポリグラフなんて名前だけど、嘘を発見してる訳じゃないし。」

「……………はい?」

「嘘発見器ポリグラフはあくまで人の反応を調べるだけの機械だもの、緊張症の人に使用すれば結果だって全然違うんだから、現にアメリカ辺りだと検査結果の信憑性が低いつて裁判だと証拠扱いされない事の方が多いし。主流は多現象同時記憶装置から特定脳波検出機器に変わリつつあるわ、コレは人が嘘をついた時に出る脳波を言葉通り検出する装置なんだけど……………まだ聞きたい?」

「いえ、もうおなか一杯です。」

「そうね、アタシもいい加減飽きたわ。まあ今回はコレだけ覚えて

おきなさい。嘘発見器ポリグラフと称される物で嘘は発見できないと。」

「含蓄に富んだお話でしたハイ。」

「それで、話は戻るけど、嘘発見器ポリグラフでも嘘を見破れない人間はいるのかだったわね。答えからすれば幾らでもあるわ。実例から見れば舌を強く噛んでその痛みに集中する事で誤魔化したとか。息を止めたりして心拍数を上げて誤魔化したとか。そもそも心拍や脈拍、発汗、呼吸は訓練しだいで自在に扱えるモノだし。」

「成程、諜報員スパイとか簡単にスルー出来そうですねえ」

「実際そうじゃないかしら。だから私が作成したのは発汗とかそういう物を殆ど無視してGSR主体で造ってみたんだけど」

先輩が苦笑を浮かべてジューズを呷る。

「一人だけいたのよ、どんな質問をしても一切フラット、針に動きが出ないって人が。」

ぐしゃりと太刀風先輩がスチール缶を縦に握り潰す。

何気に物凄い事をしながらとんでもない事を言っていたような気がするのはいのせいだろっか？

「機械上の不備も考えて、数回点検した上に身体検査迄したのにフラット。計器は一切動きを見せなかった。となると考えられる可能性は大きく分けて二つ。」

珍しく真面目な顔だ。これで服装さえまともなら才女とか才媛なんて言葉が相応しい外見なのに。

「一つは自分の身体を完全にコントロール出切る。脈拍も呼吸も血圧も発汗も、だけど此処までは訓練しだいでどうとでもなる。問題はその先。不随意な物なのだから制御しようが無いのにして見せた。五感に感情。下手をすれば生体電流や脳内物質も自由に操っている事になる。」

何その人外。

「二つ目に魂の底から嘔吐きだと言う事。」

「どう言う意味ですか？」

「自分の嘘を心の底から本当だと思い込めると言う事。」

「つまりあからさまに他人から見ても嘘だけど、本人がその嘘を本当だと自分の身体や心にすら嘘をついて騙しているから反応が無いって事ですか？」

太刀風先輩が頷く。

どちらにしろそんなの両方人間じゃない。

「だから優月も気をつけなきゃ駄目よ、玖韻先輩には。」

「そう、俺には気をつけるんだよゆづもなぎも。」

肩をぽんと叩かれると同時に後ろからそう呼びかけられ私と太刀風先輩の時間が止まる。

「く……………玖韻先輩……………何時からいらしゃったんですか？」

ぎりぎりと言が聞こえてきそうな動きで振り向き太刀風先輩がそ  
う尋ねる。

「うん？基本理念さえ理解してれば辺りぐらいからかな。」

ニコニコと満面の微笑を浮かべている。が、その笑みが怖い。

「もう夕餉の時間だ、今日はレニ姉さんが得意料理ご馳走してくれ  
るって言ってたから、そろそろいかないとレニ姉さんすねる。」

私物らしき絶望だってもう少しは明るいだろうなんて思わせるほ  
どに真つつつつつ黒な浴衣の裾を翻し先ひるがえにすたすたと歩き出す。

「…………じゃあ先輩、嘔発見器にひっかかった人って。」

私が恐る恐る指差す真つ黒な背中を見ながら太刀風先輩が一つ頷  
いていた。

結局なんで玖韻先輩が笑った事で太刀風先輩が正体を見破ったの  
かその理由を聞くのをすっかり忘れていた事を思い出したのはテー  
ブルに着いてからだった。

## 第一幕 忘我邸一日目？（後書き）

嘘発見器についてウィキペディアを参照させて頂きました。



## 第一幕 忘我邸一日目？

「ヘイ、ミス優月こんな所で何してマスカ？」

2階の喫茶室で紅茶を楽しんでいた私に声を掛けてきたのはキース先輩だった。

「さつきレニエルさんに楓さんカエデのいれてくれる紅茶は美味しいって聞いたから早速ご馳走になっていたんです。キース先輩も如何です？」

「オウ、ではミーも頂きましょう。」

キース先輩が着流しの裾を掴みながら歩いてくる。着替えたのか南無阿弥陀仏の文字はない代わりに「我二敵無シ」と書かれている。どちらにしろ余りいい趣味じゃないけれど、細長い体とカールがかかった金髪にミスマッチして妙に似合っている。

そういえばどうしてキース先輩はこうも和風趣味なのだろう、聞いた事も無いが始めて見た時から派手な着流し姿を通している。

物凄く聞いてみたい気もするが、聞いたら聞いたで思いつきり後悔しそうな気もするのは何故だろう？

何だか葉隠とか武士道とかを延々と説かれそうな気がする。

「生憎準備中の為あまり種類がございませんが、何になさいますか？」

楓さんが耳に心地よい声でキース先輩に聞いている。

楓さんとは耀耶麻三姉妹の次女である。本来ならまだここ眩暈館

はオープンしていないワケであつて、昼間は様々な準備の為に大勢いた従業員の方々も夕食前には本館、忘我邸の方にある宿舎に戻つてしまつてゐる。それでも最低限の人員は残しておかなければいけないと言ふ事で夕食の席で紹介されたのが耀耶麻三姉妹こと、長女<sup>テル</sup>耀耶麻栳、次女<sup>テルヤマカエデ</sup>耀耶麻楓、そして三女<sup>テルヤマクレハ</sup>耀耶麻紅葉と秋に産まれたという理由から冗談でつけられたような名前の三姉妹だつた。私達が滞在している間はレニエルさんと耀耶麻三姉妹が世話をしてくれるという。

それにしても耀耶麻さん。一卵性の三つ子と言っただけあつて。外見はそっくり。その上服装も同じなら声質も身長も仕草もそのタイミングさえも同じで見えていて複雑な気分になつた。一応胸に名札は着けているものの交換したら私には当てられる自身が無い。太刀風先輩の言では多少匂いに違いがあるというけど、正直私には分からない。

「そう言えばキース先輩はどうしてココへ？」

自称楓さんからアール 그레이を受け取り満足そうな顔で味わつてゐるキース先輩に声を掛ける。

「実八、玖韻先輩に一杯ヤロウと誘われマシテ、1階へ行くのにココを通ろつとしたらミス優月がいたワケデース。」

そのまま優雅な仕草で紅茶を飲み干し立ちあがる。

「ソウ、もし良かったらミス優月、ソレにミス楓も一緒にイカガデス力？」

私は兎も角楓さんはキース先輩の突然の提案に少し戸惑つたような顔を浮かべる。

「……そうですね、今日は皆様の他にお客様はいらっしゃいませんし、片づけをしてから時間があるようでしたら覗かせていただいても構いませんか？」

「勿論デース、ガレキもサマーの後の祭りイイマスカラ。」

キース先輩の言葉に楓さんが笑顔で首を傾げる。

それを私はひやひやとした気分で見ている。何しろ派手に間違っている上に何だか混ざっているが、キース先輩本当は枯れ木も山の賑わいって言いたいんだから無礼千万な人だ。もっともキース先輩の場合諺の意味をちゃんと理解しているかどうかという問題もあるんだけど。

「ミス優月はドーシマスカ？」

私の非難が籠った視線なんて気にもせず明るい調子でキース先輩が聞いてくる。

「じゃあ私も一緒にします。」

お酒にはあまり強くない。かといって嫌いというわけでもなく、寧ろ好きな方だ。

「オウ、相変わらず下手の横好きデース。」

珍しくキース先輩が正しい諺を言えた。でもその使い方は違う。楓さんが私とキース先輩のカップを片付ける姿を後ろに見ながら喫茶室を後にして第一廊下を越えホールから下に向かう。

1階のバーに入ると私とキース先輩以外のメンバーが揃っている。

緩く弧を描くカウンター一番右奥にレニエルさんが背の高いスツールにちょこんと腰掛けている。呑んでいるのは青い色をしたカクテル。頬は少し赤く染まり目は潤み、その幼い外見とは余りにアンバランスな要素が見事なまでに可愛らしく太刀風先輩や霞桜先輩でもないけど何だか攫ってそのまま大きめのドールハウスか何かで飼育と言えば語弊があるかもしれないけど、他に相応しい表現もないので飼いたくなりそうだ。とても年上の女性に思って良いような感情とは個人的に言えないけど、時に感情は年の差なんて越える物だし、それに実際六歳しか変らない。

その隣に玖韻先輩。真つつつつつ黒な浴衣はさっきのまま、黒髪は緩く三つ編みにして肩から胸元へ垂らしている。こちらも白い頬が薄っすらと紅く目は潤み近寄り難いほどに綺麗だ。妖艶とか艶麗なんて艶の文字が入る言葉が似合いすぎる。こういう人が知り合いだと自分の価値が上がったような気がして少し良い気分だ。もっともその価値は私を通してそういう人にお近づきになりたいという事から産まれるのであって、私には何にも正規の意味で付加価値が産まれているわけじゃあないのが悲しい所。

呑んでいるのはどうも日本酒らしく手には艶やかな漆塗りの杯を持っている。カウンターの上には大振りな白鳥徳利。あの様子からして結構聞し召してるんだろう。

一人離れたボックス席に座っているのは霞桜先輩。此方も着替えていて白のストラックスに深紅のシルクシャツ。原色系の色が好きな人だ。淡い色は覇気が無く、着ると侵食されそうで嫌なそう。シヤワーでも浴びたのか髪も今は降りている。意外な事にその外見からは想像もつかないが霞桜先輩はお酒に弱い。呑めない種類も多く唯一嗜むのがブランデーだけだというのだからある意味徹底している。呑める量も多くないので手に持ったブランデーグラスには指一本分程褐色の液体が揺れている。またお酒は静かに一人で飲むものと妙な拘りを持っていて今日もそれを守っている。良い意味でか悪い意味でかは置いておくとして絵になっているのは間違い無い。

カウンターの真中辺りに鴛淵先輩。着替えはしているもののその柄は筆舌しがたい。ズボンに蛇皮、或いは蛇皮柄。シャツに至っては極彩色の金剛界曼荼羅こんごうかいまんだらときた。もしかしたら胎藏界曼荼羅たいざうかいまんだらかもしれないけどそこまでは分らない。一体何処で服を買ってくるのか今度聞いてみよう。

でも……誘われたら困るなあ。

呑んでいるのはビール。こうして見ている間にもビールピッチャーから黄金色の液体が見る見る鴛淵先輩の口に消えてゆきサーバーから慣れた手つきで泡と液体の見事な対比をピッチャーに満たしては次々と飲み干して行く。

さらにその隣でレニエルさんに油断の無い視線を送りながらも鴛淵先輩と呑み比べに興じる太刀風先輩の姿。鴛淵先輩が量を飲むのに反して太刀風先輩はショットグラスをカパカパと空けていく。多分中身はアブサンとかスピリタスとかレモンハートとか矢鱈度数の高いヤツなのは間違いない。火でも付けたらさぞかし良く燃える事だろう。火葬場要らずだ。

……いえ、そんな事企んでいませんよ。

「おやキース、遅かったやん。」

バーに入ってきた私達に気がついたのか色つばい顔のまま玖韻先輩が話しかけてくる。

口調が少し関西風なのは霞桜先輩とつるんでる内に感染うつってしまったのがアルコールが入ると出てくるらしい。

中性的で辛うじて男性に聞こえる声でどうにか男女の識別が可能な感じだ。

「ええ、チヨット喫茶室に寄ってキマシタ。」

「フフ、楓さん可愛かったからやろ、どうするレニ姉さん、従業員

に手出そうとしてるのが一人いるけど?」

「もう、玖韻ちゃん、私はそんな事一々言う程狭量じゃないわよ。子供じゃ無いんだから本人達がそれで良ければ良いじゃない。」

「そうなん?それなら椛さんは、妹サンが誑たぶらかされそうやけど?」

カウンターの奥でシェイカーを華麗に振っていた椛さんが微笑む。態々着替えたのかメイド服姿から白のタイトなドレスシャツに変っている。首にはワイン色の蝶ネクタイ。

「私も支配人と同意見です。それに妹とは言え個人の恋愛に首を突っ込むなんて野暮のする事です。」

その答えに玖韻先輩が満足したような笑みを浮かべる。

「うん、良い答えや、野暮はいけない。風流に行かないと。」

「その通りデース、ミーが尊敬する方もそう言ってマース。」

一つ席を空けスツールに私とキース先輩が腰掛ける。

「ご注文は何になりますか?」

椛さんが楓さんと全く同じ声で聞いてくる。そして同じ仕草でメニューを渡してくれる。

メニューを暫し模索した結果、私がモスコミュールかミモザのどちらを頼もうかと考えているとパタパタと軽い足音をさせて耀耶麻三姉妹の誰かが入ってくる。ネームプレートを見ると三女の紅葉さんだった。

「支配人、ちょっと宜しいですか？」

紅葉さんがレニエルさんに何やら耳打ちしている。

「あら……そう、通してさし上げて。」

レニエルさんの言葉に紅葉さんが頷きバーから出て行く。

「姉さんどうかしたん？」

「ええちよつとしたお客さん、ただし招かざるお客さんだけど。」

玖韻先輩の問いに可愛らしくレニエルさんはそう答えるのが聞こえてきた。

**開幕 比良坂湊の独白（前書き）**

二人目の主人公？が舞台上上がります。



## 開幕 比良坂湊の独白

世の中は偶然で成り立っている。

俺はそう思つて過ヒツセンごしている。

この世の全ては必然である。全ての出来事は起こるべくして起こるのだ。なんて事を聞いた事も有るが、俺に限らず大抵の人間に自分が偶然生きているのか、それとも必然の上に生きているのか、もつと言つてしまえば自分が本当にこの世界に存在しているかどうかですら分からないワケで……何だか話が反れてしまった気がする。そう俺が言いたい事はこの世が偶然の産物だと言う事だ。例えば世界が滅亡するとすれば、そんなもの運命でも何でも無く偶々偶然の上滅ぶんだらう。

天文学的に一の数字だろうが確立なんて所詮目安。起きてしまえば現実はそのだけしかない。

実に不愉快だが。

だから俺がアイツと出会つた事だつて偶然でしかない。類は友を呼ぶなんて言葉は大嫌いだ。そんな表現を信じてしまったら俺はあんな連中の類であり友という事になってしまう。それは避けたい。

とはいえアイツと出会つてしまった事は事実であつて……

もう面倒臭くなつてきた。

要点だけを述べよう。

俺はアイツと出会つた。

それが偶然か必然なのかは知らないけど。

それだけだ。

**第一幕 邂逅？ side比良坂（前書き）**

今回の諸注意。

軽いグロ描写があります。

主人公が変態です。

以上の二点にご注意を。

## 第一幕 邂逅？ side比良坂

俺の朝は早い。

尤もこの早いは世間一般から見ればという話であって俺からすれば普通なのだがアイツに言わせると「棺桶に片足突っ込んだ年寄りより早い」だそうで……つまりは早いのだ。

朝は日が昇る頃に起きている。俺の部屋には時計もテレビも無いから特に毎朝時間を確認した事も無いが四時五時といった所だろう。そしてベッド代わりのソファーに寝転がったままソレを手にとって暫し考えを巡らす。

手にとるソレは日によって違う事もあれば一週間も二週間も変わらず同じ事もある。

ソレは例えば切れ味だけは抜群の剃刀だったり、怖い鋭さのナイフだったり、はたまたちよつと非法な手段で手に入れた速効性猛毒、青酸だったり砒素だったり、さらには完全に非法な手段で手に入れた銃弾の詰まった拳銃だったり。つまりはそんなモノだ。どれも上手く使えば簡単に人が殺せて、使い方が下手でも自分は殺せる。

その日は拳銃だった。装填数二発のデリンジャーを右手に握り俺は日課の考え事を始める。その内容は今日どれだけ楽しい事があるか。例えば出かけて何か出会いがあるかもしれない。何か事件に巻き込まれるかもしれない。

こうやって毎日出来るだけ楽しい事を考える。そうして一日を生きる気力が浮いたら右手のソレは鍵の付いた箱に納めてソファーから起きる。

もし気力が浮かばなかったらそのまま引金を引く。今まで剃刀を持っていた時に一回どう考えても生きる気力が浮ばず首筋を切り裂いたものの浅かったのか場所がずれたのか血は出るものの一向に死

ぬ事も無くソファアを汚しただけで、終には偶々尋ねてきた知り合いに発見され病院に搬送されてしまった。

だから今日は拳銃を選んだ事に運が良いと思ったものの、考えている内に集めている本の最新刊の発売日だった事を思い出して拳銃をしまい込み身体を起こした。

夜が明けきるのををコーヒー片手に見て過ごし、本屋の開店時間を待つて出かける。そしてお目当ての本を手に取り立ち読みを始め、途中近所の喫茶店で軽食を取り、再び立ち読みに戻り、気が付けば午後の八時。約9時間程立ち読みをしていた事になるがコレも何時もの事なので気にせず会計を済ませる。

アイツから言わせると5時間以上立ち読みするようなのも一種の変態だと言われた。余計なお世話だ。本屋の楽しみは立ち読み以外に何があるというのだろうか？後は店員をか如何にからかう事ぐらいだ。

少々小腹もすいたので行き付けの居酒屋へ行くと臨時休業の札が下がっている。

今思えばココが分岐点だった。選択肢は無限とはいかないまでの数え切れない程にはあったであろう。その中で俺の頭に浮んだのは二つ。一つは大人しく帰る。もう一つは他の店に寄る。

俺は後者を選び普段は入らない裏路地に入ると阿弥陀籤のように行き当たるたび道を変え、奥へと進み、そしてその店はあった。こじんまりとした小さな店。イギリスにでもありそうなパブ風の外観をした店だった。

こんな店があったのかと少し驚きながら店に入るとアイツはいた。その時の俺の印象を言えば妙な格好のヤツだと思ったただけだ。

客はその怪しいヤツ以外誰もおらず手前のカウンター席に座ると気難しい顔をした爺さんが「ご注文は」と短く聞いてくるのでおメニユーを捲り適当に注文した所で俺は何となく一番奥の席に座るヤツを観察していた。

全身黒尽くめ。髪は真っ白。そんな井出達。

銅製のビアジョッキに注がれたビールを飲みながら眺めていると俺の視線に気が付いたのかアイツは俺の方に顔を向けるとニコリと笑った。

……………正直俺はその顔に見惚れていた。白を通り越して青白い肌、青紫の唇そして透き通った紅い瞳。

ソイツは立ち上がるとゆっくりと俺に近づき、そして話しかけてきた。

「問題デス。」

透き通った声が脳に響く。ただ「デス」の部分がどう考えてもDEATHとしか変換できない発音だった。

「ある所に山岸クンと九段クンがいました。所がまたある日如何なる事情からか山岸クンが死んでしまいました、すると九段クンも死んでしまいました。何故でしょう?」

何故も何もないと思った。死んだらそれまでハイおしまいよ。

死んでしまえば元人、肉の塊に過ぎない。一日どころか数時間も放っておけば腐臭を放つ肉の塊だ。だから死んでからあれこれ言うなんて愚の極みだと、何時もなら思うのだが何故かこの日はそうも思えなかった。

「早く答えなよ、ボクには時間が無いんだ。」

ニコニコと笑いながらこんな店にも関わらず、猪口を片手にソイツは急かしてくる。

俺は急かされているにも関わらずソイツを間近で改めて観察していた。

靴は踵の高い先の尖った黒い革靴、細かなステッチで模様が入っ

ている。レザーパンツに大振りなゴシック十字を模したバックルが迫力のあるベルト。胸の大きく開いた、十二月という冬の最中だと言うのに胸元の大きく開いたレザーらしき黒いシャツ。背はあっても華奢としか形容できない身体。ただし痩せていると言うよりは締まっている。肌は白を通り越して青白い。黄色人種の持つ肌色を薄めた白でもなく、白色人種の持つピンクがかった白でもなく、どこまでも虚無的なほどに真白な肌。

唇は董色ともとれる薄い青紫。

だが、印象的だったのは髪とその目の色だった。

髪の色は白銀。どこまでも醒めた冷たい色の銀色。

目の色は深紅。落日を想像させるような強い深紅。なのにどこか醒めていて、その色を表す言葉を考えろと言われれば、そう、凍りついた炎のような色。

冬季野外戦闘用迷彩服でも着られて目を閉じ雪原にでも紛れ込まれればまず発見は無理だ。

「ほら、早く答えなつて。」

再び急かす声に俺は口を開く。別に答えを用意していたワケでもなくそれとなく考えた事を口に出した。すると。

「……うん……なる程その答えも在りだね、キミ氣に入ったよ。縁があつたらまた逢おうね。」

そう言つてソイツは手早く勘定を済ませると長いコートを肩に掛け店から出て行く。

俺はその後姿を呆然と見送りながらすっかり温くなったビールを呷った。

結局その日はソイツの事が氣になってしっかり酔う事も出来ず中途半端な気分でそのパブを後にした。料金は想像以上に安かったのを

覚えている。

その帰り道の事だった。知らぬ間に長居をしていたらしく店を出て携帯の時計を見てみると深夜1時を過ぎている。何だか釈然としないまま帰途を急いでいる時だった。近道の為通りぬけようと入った公園にソレはあった。

こんな市民公園には勿体無いほどがっしりとした立派な木製のベンチの上、青白い街灯に照らされソレはそこに座っていた。

年齢は二十歳前後に見えるソレは一糸纏わぬ姿でそこにいた。

遠目に見える肌には染み一つ無く痩せ型な体形にも関わらずそれなりに胸はあり好みの体つきだった。問題点と言えば首から上がその膝の上に置かれていた事だろうか。

近寄って首の切れ口を街灯の明かりを頼りに見て見れば素人目に見ても綺麗な物。組織が潰れたり骨が欠けたりしていない。背骨に絡み付く神経が印象的だった。

膝の上の顔も髪を掻き揚げて覗き込んでみれば安らかな顔をしている。まるで寝ているかのような顔とはこんな顔の事なのだろう。できるならこのまま保存しておきたい程好みな顔をしていた。まだ切られたばかりらしく身体は温かく首からも血は収まる事無くどくどくと溢れ出ている。

俺はどうしようか暫し迷ったものの白い肌が紅く濡れてゆくのを見ている内にも好奇心が湧き首の切断面に舌を這わせ血を舐め取っていた。何故そんな事をしたのか未だに分からない。

ただその時はそうしかかったのだ。

生暖かい感触、骨に、血管に舌が触れびくびくと感触が伝わってくる。塩辛い生臭さと鉄臭い味、俗に鉄の味と言われる血の味だけじゃなく、甘いようにも感じる脂の味、非従順的な酸味と苦味のする胃酸、経験した事のない髄液、すべらかだったたりねっとりしていたり刺激を感じたり、様々な感触と味が舌に触れていた。だがそれ以上にその時俺の舌はどうしようもなく陰鬱で背徳的な甘味を感じていた。

マフラーが血で汚れないようなんてしょうもない心配をしながら舌ですべすべした背骨の周りを抉ると様々な太さの血管や神経が絡み付き、それを舌で引っ張り出し口の中で弄び時折歯でぶつりと噛み千切る。

溢れてくる髄液が顔まで飛び、食道からはゴボゴボと久方ぶりに水を流す配水管のような音を立てて刺激臭まじりの黄味がかった液体が登り俺の舌を刺す。

肉は皮膚との間から滲み出る甘い脂と無味のさらさらとした液体、それになつとりとした血で覆われ舐めていて楽しかった。

舌を這わせたまま血で塗れた首筋を下り胸元を舐めている時にその声は聞こえてきた。

「おや、予想外の獲物がかかったね。」

驚く気も起きず、顔の体液を拭うのも面倒でそのまま振り向くとアイツは立っていた。

「キミは血液嗜好でもあるの？それとも吸血鬼だなんて言うんじゃないよね？」

小罵詈にしたような笑みを浮かべ俺に問い掛けてくる。

「……………少なくとも俺は自分の事を吸血鬼なんて自覚した事もないし血液に殊更執着があるわけでもない、だから今日は……………たまたまそつという気分なんだ。」

今更拭った所で顔の血や脂が取れるわけでもないのですそのまま不敵に、態々音をたてて舌なめずりをして笑ってやる。と笑った所で俺はソイツが手に持っている物に気が付いた。



「…………で、どうする？俺もこうなるのか？」

親指で背後の元人を指す。

「勘違いしないで欲しいな、ボクはその人を殺してなんていないよ。ただ服を脱がしてベンチに座らせて首を刎ねただけ。」

右手に持った鞘に入ったままの日本刀を少し持ち上げて見せる。

「昔から言うでしょ、人を切ると格段に腕が上がるってね。」

シュリィインと黒蠟塗りの鞘から日本刀を引き抜く。血や脂による波紋の乱れは無く青白い明かりに照らされ浮かび上る三日月型の光にゾクゾクと少し興奮した。

## 第一幕 邂逅？

街灯に照らされた日本刀が青白く光る。

切っ先は揺れる事無く俺の方に向き、その赤い瞳から表情は読み取れない。ただ、顔だけが笑みを浮かべている。

「それでオマエはここに死体があつたから切ってみたって事か？」

「まあね……… ついでに言えば切るのは何処でも良かったんだ。でもできるだけ血の出る所を切ればその匂いに惹かれて何か来るんじゃないかと思っていたらキミが来たんだよ。」

そんな事をいわれたらまるで俺は誘蛾灯ゆうがとうに寄つて来た蛾か何かのようだ。

そして誘蛾灯に誘われた蛾の行く先は決まっているような物だ。天国か地獄かは知らないが、そもそも蛾に天国とか地獄とかの概念があるのかどうかすら知らないのでもっと具体的に言うなら科学的に殺虫剤か、陰険に毒瓶か、はたまた思いきり良く丸めた新聞紙か。

方法は違えど結末は同じ。

「一つ聞くがこの死体は？」

「知らない。この人を殺したのが誰かとか殺害方法とか殺害理由とかは知ってるけどこの人が誰だったのかは知らない。」

俺が聞きたかったのはそう言う事じゃない気もするが、多分この答えで良いんだろう。

「ボクも一つ、いや二つ聞いて良いかな？」

「聞くだけならな。」

「いいねそういう受け答え、ボク素直じゃない人は嫌いじゃないよ、好きでもないけどな。」

ニコニコと嬉しそうにソイツが笑う。

「じゃあまずキミの名前は？」

「名前？戸籍上のだったら一応比良坂湊ヒラサカミナトって名前だ。」

「忌み名いみなは？」

「忌み名？在るかもしれないが俺は知らない。それにそんなモノいまだに在るのは皇族と一部の華族ぐらいだろ。」

ふうんとソイツは頷き俺の名前をぶつぶつと何度も口の中で繰り返しながら空いている手でペンを取り出すと口に咥え、器用に手のひらに何やら書き付けると、ぷつとペンを吹き棄てる。

「……うん、比良坂湊ね、これで多分キミの名前は忘れないよ。」

街灯の下、そいつの左手には俺の名前が辛うじてカタカナと認識できる字で踊っていた。

「別に覚えて貰う必要は無いと思うけどな。」

「またまた、遠慮しなくて良いんだよ。」

……どうもやり難い。

「それにね、キミがどう思おうとボクが勝手に憶えておきたいんだ。理由なんか聞いちゃ駄目だよ。それは余りにも野暮だからね。」

言い直そう。滅茶苦茶やり難い。

「聞きたい事の二つめ。美味しかった？」

「何がだ？」

ずっとソイツが刀で俺の背後を指す。そこにあるのは当然先ほどまでの勢いはなくなったものの、まだ首から血とかを流す死体。

「……………俺は甘いと思ったよ……………」

そこまで言って少々悪戯心が浮ぶ。

「気になるんなら味見したらどうだ？」

困った顔でも浮べるか、そんな俺の目論見はあっさりと覆された。

「それもそうだね。」

言ったかと思うと手馴れた仕草で納刀し、ソイツはすたすたと死体の方に近寄り躊躇<sup>ちゅうちう</sup>や嫌悪の欠片も見せず赤い舌を出すと血が溢れる切断面を、食道の部分を裂け頸動脈辺りを大きく舐め上げた。上質のワインを鑑定するソムリエールでもないだろうにソイツは

口の中で暫し血を噛みじつくりと味わってから嚥下し青い唇を舐めてからこう言った。

「なる程、悪くはないよ。」

ソイツの口元から一筋飲み込み損ねた唾液混じりの血が流れた。白い顔に赤い血が数滴飛び散っていた。

それを見た時。

前々から落ち気味だった俺は完全にあがらう術も無く、いや正直に言えばあがらう術はあったかもしれない。だが、俺はその術に気付こうともせず。

堕ちた。

「そう言えばまだ言ってなかったねえ、ボクはね夢幻夜哀ムゲンヨアって言うんだ。夢幻に夜の哀しみって書くんだ、憶えてくれなくても憶えてくれてもどっちでも良いよ。ボクは人が覚えようとする事まで一々口を出すほど傲慢なつもりは無いし、でも出切れば君には覚えておいてもらいたいかな。」

そう長々と物々しい名前を名乗った後気に入ったのかもう一度切断面に口を近づけ今度は舐めるような真似をせず直接動脈の辺りに口を付けて音を立て鮮血を呑み下し。

「やっぱり悪くない。」

ポケットから出したレースの白いハンカチで夜哀が優雅に口を拭き、そして俺を見据える。

「ねえ湊？」

「いきなり呼び捨てか、図々しいな。」

「湊って良い度胸してるよ、普通この状況だったら逃げるか叫ぶか警察呼ぶか持ち帰るか。ボクは正直その四つのどれかじゃないかと思ってるのに湊ったら見事にボクの想像を裏切ってくれたね。」

持ち帰りをするかどうかは微妙な線だ。死体愛好の趣味でもあれば話は別だが。

でも……

ちらりと首の方をしてみる。

真つ赤に染まって中々凄絶で良い感じた。  
なる程、持ち帰られてもおかしくない。

「良かったじゃないか、自分の予想とか想像が裏切られるっていうのは人生において数少ない楽しみの一つだろ。」

俺の言葉に夜哀の変化は劇的だった。

[illegible]

夜哀の哄笑が公園に響く。  
人が来ないか少し不安だ。

「所でコレから湊どうするの？」

哄笑とも狂笑とも言えるものを一頻り上げた夜哀がそう尋ねてくる。

「そつだなあ……」

辺りを見まわす迄もなく目に入るのは首切られ死体と寒風にはためくロングコートが格好良い日本刀を下げた夜哀の姿。チエーンソールを構えたレザーフェイスとまでは言わないが、お世辞にも平和的とは言えない格好とアイテム。

「とりあえず、オマエみたいなのを野放しにしておく訳にはいかないだろ？」

「と言う事は、警察にでも行くつもり？」

「今それを考えているんだよ。」

ふーんと夜哀が頷きながら日本刀を鞘から引き抜く。

「何で刀を抜く？」

「うん、国家権力<sup>イヌ</sup>なんて呼ばれた所で困らないけどボク面倒臭いのキライだし、それに人を切るのって結構体力使うんだよ。」

さらりと恐ろしい事を言ってくれる。

「……いいじゃないか、適度な運動は身体に良いってよく言うだろ？」

「アハハ、人斬りダイエットって？、でもボクには必要ないや今のプロポーシオンで十分満足してるよ。」

なる程。

引き締まった体形を誇示するような夜哀のポーズに思わず俺は頷いていた。

「でも……キミ一人切るぐらいなら確かに程よい運動かもね……」

夜哀の目に剣呑な光が宿る。

まあコイツが出てきた時からそんな予感はしていた。

「そう……だね……湊はこの公園に来るべきじゃなかったかもしれない。」

そんな事はこの状況を鑑みれば言われなくたって分かる。  
だが、来てしまったものはしょうがない。偶然そうなってしまったのだ。

「残念だなあ……せつかく湊とは仲良くなれそうだったのに。」

残念だとか言う割には満面の笑顔だ。

目から光が消えてはいるが。

抜き身の刀を提げた夜哀が近寄ってくる。

ふと思う。

どこで狂ったのだろうか？

あのパプで夜哀に合ってしまった事か？

行き付けの居酒屋が休みだった事か？

本屋に長々と居座り続けた事か？

それとも

それとも今朝俺が死ななかった事か？

一瞬視界の端に銀色の三日月が閃く。

熱かった。

痛みより先に熱さが来ていた。



夜哀の刀は俺の肩を刺し貫き、それを目で確認して漸く痛みが訪れていた。

「……痛いな。」

夜哀が眉を顰め俺を妙な顔で見る。

間近に迫った顔に思わず息を飲み一瞬俺は痛みも忘れる。

「……それだけ？」

邪気の欠片も無い顔。

純粹に不思議がっている顔。

「それだけって何が？」

「ボクはね、今から湊を殺すんだよ。それもね手足の腱を切って身動きができないようにして、喉を裂いて声が出せないようにして全身の間接を丁寧に外して、骨を折れる限り折って身体を刻める限り刻んで、キミが百篇殺してくれて哀願する姿が見たいって言うんだよ。」

「何だ、お前サドか？どうでもいいな、やるなら好きにしろよ、抵抗する気なんて無いよ。」

夜哀の右手を掴み、俺の方に引き寄せる。

同時に肩を貫いた剣先はずぶずぶと沈み、痛みと熱さの中、固く冷たい刃物が肉を切り裂き、骨を擦りながら進む感触が伝わってくる。背筋ががくがくと振るえ吐きそうな程に気持ち良い。

悪くは無い。

痛みはこの世に存在している事をわずかなりとも伝えてくれる数

少ない手段の一つだ。

それにキツイ体験っていうのは結果がどうあれそれなりに面白い。そう、面白い事が重要だ。

面白くないモノ何て存在する価値すらない。

だが、夜哀は自分で言ったような解体作業を俺に行わなかった。代わりに一言。

「……………キミこれから死ぬより酷い目に合わされて、その上でボクに殺されるんだよ、何か間違っていない？」

殺す事は決定事項か。

夜哀の質問に俺の頬が緩む。

「何も間違っていないだろ、お前は俺を殺す、俺はお前に殺される。それだけだ。もっとも俺はともかくお前には責任があるぜ。」

「責任？ボクになんの責任があるの？」

「さっき言ったな、俺に百篇殺してくれって哀願する姿が見たいって。そう言った以上俺に百篇以上殺してくれって哀願させて見るよ。俺はソレまで俺の体が原型を留めていない方に賭けるがな。」

暫し夜哀が呆然とした顔を浮かべていた。がやがてその表情は笑みに変わり、瞳に光が戻ると嬉しそうに夜哀が一気に刀を引き抜く。痛みもあるが体内を異物が一気に動く感触が気持ち良いと同時に気持ち悪く恍惚と一緒に吐き気が襲ってくる。

「湊！！キミ最高だよ！！」

服が血で汚れるのも構わず夜哀が俺を抱きしめていた。

「殺さないのか？」

「うん！キミみたいなのを壊しちゃったら勿体無いもの、仲良くしようよ。」

人を殺しかけておいて仲良くしようも何もないと思わなくも無いが、俺はあんまりそういう事を気にしない性質だ。

俺をどんな目に合わそうが、俺の基本スタンスの一つ「来る者は拒まず、去る者は追わず」は変らない。

基本的に。

「ああ、構わないが出切れれば医者につれてつてくれないか？腕が上がないんだ。」

その後夜哀は公園の茂みから持ってきたポリタンクの中身を首切り死体に振りかけマツチを放り、燃え上がるのを確認した後そこに鞘と一緒に量産品だという日本刀を投げ込んで俺と一緒に公園を後にした。

こうして俺と夜哀は出会うべくしてというかなんと言うか、出会った。そして色々あった。

夜哀と出会った次の日友人が殺された。

二月にはさらにもう一人大事な友人が。

五月には俺の所属していたサークルのメンバーが数人殺された。

その一週間後には殺人の容疑で逮捕された（勿論誤認逮捕だ。）何だかこう並べて見ると夜哀は俺に不幸を運んできた様に見えるが実際の所は逆だ。夜哀は俺に刺激とその日を過ごす楽しみを運んできてくれたと言って過言ではない。つまりは感謝しているのだ。

そして話は俺と夜哀が知り合って半年、お互いの住居を行ったり

来たりする傍目に見たら付き合っているような、そう友達と呼べるであろう生温い関係にも慣れきった頃の事になる。

その日、七月も始めの日曜日、俺は溜まりに溜まったレポートにウンザリしながら取り組んでいる時から始まる。

## 第一幕 出発？

「……………面倒臭い……………」

意識もせずそんな呟きが俺の口から漏れていた。

その日、俺は朝から国際関係論こくさいかんけいろんと西洋史さらに政治学のレポートに追われていた。

「……………ぐわー」

虚空に向かって吼えて見たって終わらない。

何とか政治学と国際関係論のレポートは終わらせたものの、西洋史のレポートを前にしてそうでなくてもあまり多くはない俺の集中力はついに途切れようとしていた。

その上良く考えれば「歴史的見解による国際関係間に関する政治について」なんて題名で同じモノを三部仕上げれば終わったという事実がまた俺の集中力の減退に拍車はくしゃをかけてくれる。それでもやらないと単位が貰えない。

その哀しい事実ペンを掴つかみ情性だけで再びレポートに取り組もうかと言う時に何やら荘厳な感じのする曲が複雑な電子音で奏でられた。携帯をとり着信を見なくても誰からか分かる。この曲が好きだと言って夜哀が勝手に登録した曲で確かルクス・エテルナと言っていた。日本語に訳せば永遠の光。似合わないったらありやしない。

「もしもし？」

「……………」

無言だ。

ディスプレイを見てみる、間違いなく夜哀ユアからの電話。

「どうした？用が無いなら切るぞ？」

少し強い調子で聞くとやっと返事は帰ってきたが、声に張りが無い。

「……………湊ミナト、お願い直ぐ来て……………」

それだけ今にも死にそうな声で言って切れる。

殺しても死ななそうな、というか死という概念があるのかどうかすら怪しい夜哀だが、こんな声を出されたら友人として不安になる。携帯を持ったままチラリとレポートに目を向ける。

今の時間は午後五時。夜哀の所に出かけたとして      あと三時間頑張ればレポートは終わるだろう。

そう判断して鞆にレポート用紙と資料、筆記用具を納め慌てて俺は夜哀の部屋へと向かった。これは決して逃避じゃないと自分に言い聞かせながら。

夜哀の住居は俺の住む学生専用マンションから自転車で十分ほどの所にある、俺が住んでいる所より遙に見栄えも中身も良い新築マンションの一室に住んでいる。

ただし自転車は元より移動手段は己の足しかないから二十分はかかる。

昔は自転車もあつたがサドルだけが二回盗まれたので破棄した。サドルを盗んだヤツはきつと俺の熱狂的なファンなのだろうと思う事になっている。悪戯イタズラやイヤガラセと考えるよりは其方そちらの方がいくらか面白い。

「夜哀、大丈夫か？」

インターホンの音が気に入くわないと外してしまった為スチールのドアをがんとノックする。返答はない。

ノブを捻ってみるとドアは開いている。

「夜哀、入るぞ？」

ドアを開けながら奥に声を掛けるがやっぱり返答はない。

眩しい明かりを極端に嫌う夜哀の暮す部屋。暗いのは珍しい事じゃない。寧ろ普通だが今日は何時も点いているオレンジ色の間接照明も全て消えている事に違和感を抱き、慌てて夜哀の部屋に入った俺が見たのは惨憺<sup>さんたん</sup>とした有様だった。

埃アレルギーとやらで少々潔癖症の気がある夜哀にしては信じられない程に部屋の中は長方形の物体で散らかり大型の薄型テレビは砂嵐を映している。そしてその部屋の主、夜哀は態々フローリングの上に敷いた畳の上に倒れ伏せていた。銀髪が放射状に広がり蜘蛛の巣に掛かっている様にも見える。

「どうしたッ！大丈夫か？」

慌てて抱き起こすと顔に畳の痕をつけた夜哀が安心したような笑みを浮かべ一言ぼつりと呟く。

「……………お腹……………すいた……………」

何も言わずスリッパで夜哀の頭を一つ叩いた俺を責める事は誰も出来まい。

話を聞けばどうと言うこともない。偶々入ってみた某大型DVDレンタル店で青い猫型ロボットの映画が急に見たくなり全種類借りてきて文字通り寝食忘れて見ていたという事を俺がマンション前の自販機で買って来た100%のグレープフルーツジュースを飲みな

がら話した。

何と言つか、罵迦だ。

「コレ苦いね。」

「飲み終ってから文句を言っな。」

夜哀がゴミ箱に向かって空になった紙パックを放る。紙パックは綺麗な曲線を描き俺の隣に落ち、俺はそれを拾い改めてゴミ箱に投げ捨てる。

「で、俺を呼んだ訳は？」

「うん、ご飯作って。」

あっけらかんと言ってくる夜哀に腹も立つのも通り越し呆れてくる。

「あのな、俺締め切りの近いレポートがあるんだよ。悪いがゆつくりと飯作ってる時間は無いんだ。出前でもとれよ。」

「嫌<sup>ヤ</sup>だ」

「……………何で？」

「不味いから。」

差し出してくる出前用のお品書きの数々を見てウンザリしてしまう。どの店も俺が実際一度頼み、後悔した店名。例えば自称中華の店、「麒麟<sup>きりんてい</sup>亭」。



ヌーベルシノワを標榜する芸風にどんなものかと日替わりで出前をとったらブタの内臓と頭に牛レバーが主体となった死ぬほど血腥い上に見た目がスプラッタかつ猟奇的な絶句モノの中華丼が届いた。例えば蕎麦割烹と銘打つ「杏庵」。

「100% 粉使用」何故かお品書きの蕎麦粉の部分が消えている事に興味を持ち盛り蕎麦を頼むと届いたのは餛飩だった。文句を言うと小麦粉100%との蕎麦だと逆ギレされた。どうも蕎麦粉を使っていない時点で蕎麦じゃないと言う事にこの店は気が付いていない。

他の店も似たようなものだ。

石膏を固めたようなピザが名物のスペイン料理店「かんぱねるら」もう平仮名の辺りが胡散臭い。それ以前にピザはイタリア料理じゃなかったか？

因みにカンパネラはイタリアの哲学者だ。

……………どうでもいいかそんな事。

生ゴムを焼いたようなお好み焼きが届くお好み焼き屋（広島）店主は広島県人に土下座して謝るべきだ。というか粉物を愛する全ての人に対して焼き土下座しろ。

看板商品がフルーツ寿司の寿司屋「出目金」果物と酢飯、だけならまだしも塗られた煮きりが妙に不味く絶大な不協和音を奏でる。ワサビの代わりに塗られたチョコやジャム、蜂蜜がクリーンヒットだ。味を表現するなら……………煮きりが焦げ臭くどす甘い。

もう一つの名物、ウシガエルのオタマジャクシの内臓を抜き酢で締めご飯を詰めた何処かの名物オタマ寿司をパクッたとは思えない（出目金寿司）はその造型に口に入れる事さえ出来なかった。まさか中身を抜かれ酢で締められた出目金があんなに見えて辛い物とは、結構予想外だ。

このラインナップでは夜哀が嫌がるもの分かる。どの店も共通点として掛値無しにマズイ。身をもって俺には分かる。

「それなら交換条件だ。」

鞆からレポート用紙と資料を出し夜哀の前に置く。

「俺が飯を作っている間少しでも良いからレポートを進めておいてくれ、もう書き写せば良いだけにしてあるから。」

「良いよ、これで契約成立だね。」

ニヤリと妙にしてやっтарいの顔を浮べる夜哀に騙されたような気がしないでもないが取りあえず夜哀に手渡されたエプロンを手に台所に立つ。

「冷蔵庫の中のモノ好きに使って良いから」

お馴染みの眼鏡を掛けたガキの情けない声と一緒に聞こえてきた夜哀の声に、さらに何処で手に入れたのか聞きたいような聞きたくないようなリボンとフリルだらけの黒いレースエプロンを見てしみじみと騙されたような気がした。

**番外編 玖韻玲音の日常？（前書き）**

番外編になります。本編には一切関わってこない筈ですので宜しければどうぞ。

## 番外編 玖韻玲音の日常？

俺の通う大学に玖韻というヤツがいるのは結構有名な話だった。

本名は誰も知らない。ただ、自己紹介の時には玖韻と名乗り皆も玖韻と呼んでいた。

実際の所ウチの大学の学生に間違いはないのだから学生課に問い合わせれば名前ぐらい教えてくれるのだろうが、そこまで動く気力は沸かない。何しろ自他ともに認める不精モノなのだから仕方が無い。

それはさておき  
閑話休題。

さて、玖韻という人物を簡単に表すなら、その顔は何処までも美形、嫌味を通り越し呆れるほどに美形。

その性格は何処までも不明、残酷なのに優しく、冷静なのに単純歪曲的かと思えば直情的、感情豊かなのに無表情。ただ破綻している。

何時だつて漆黒の服を身に纏い、自分の感性を刺激する物を求めてフラフラと動き回る雲か風、そんなヤツだ。

俺はと言えば共通するのは酒好きな事くらい、見た目も普通なら性格だつて各種診断をやってみた所どれも普通の結果だったという玖韻とは正反対のような人間である。なのに、何故か玖韻とは気が合う、というよりも一方的に玖韻が俺を誘ってくる。決して悪い気はしないものの以前何故かと尋ねて見ると「キミはねボクの知的好奇心を満足させうる性質を持っているんだ」とよく分からない答えが帰ってきた。

俺と玖韻の出会いについては少々長くなるので割愛する。かつあい機会があれば話す事もあるだろう。

もつとも俺にとっては結構忌わしい記憶なので話さない可能性の  
ほうが高いが。まあそれはそれだ。

さて、話は変わるが、当時俺は焼酎が大好きだった。

米焼酎や麦焼酎は癖が無くていくらでも飲めた、蕎麦焼酎も飲んだし、ほのかに胡麻の匂いにする胡麻焼酎や少し癖の強いのがまた美味しい芋焼酎、それに栗焼酎なんて堪らなく大好きだった。そんな焼酎大好きな俺が突如全く飲めなくなったのには玖韻が関係している。

そしてその日も俺は玖韻に呼び出されていた。

呼び出された所は最近お気に入り（いじりやう）の居酒屋その名も「五百釘」俺も以前玖韻と一緒にきたのだが圧巻させられたのはその（お品書き）と銘打たれた小冊子にずらずらと並ぶ地酒の数々、店主が胸を張りながら百種類何時でも揃えていますという言葉に玖韻が狂喜しそれ以来三日と空けず通っている店だ。また、酒だけじゃなく肴も中々イケル店だった。

扉を開けるとそう広くもない店内を見渡すまでも無くカウンター席に腰掛け上機嫌な顔で猪口を口に運ぶ玖韻の姿が見える。

「いらつしゃいッ」と威勢の良い声を聞きながら俺は玖韻の隣に腰掛けると間断なく目の前に突出しとお絞りが置かれ眼が妙に恐い胡麻塩頭の大將が「ご注文は」と聞いてくる。六時という晩酌には少し早い時間だと分かつてはいるが、酒好きの俺が厨房の方から漂ってくる匂いに耐える事が出来る訳も無く、普段なら焼酎を頼む所だが隣で玖韻の飲む酒の匂いに誘われ「久保田の千寿を冷で肴は適当に」と注文したのを見計らったように玖韻が話し掛けてくる。

「遅かったね、確か五時ぐらいに電話したと思ったけど？」

綺麗な顔を朱に染めそう言ってくる。相変わらずソッチの気の無い俺でさえ心が揺れ動きそうな顔だ。

「しょうがないだろ、今日は五限目迄あったんだから、俺の所為じゃないよ、それとも何か？俺に授業サボって来いっていつのか。」

「そうだよ、当たり前だろ。」

涼しい顔でそう言い放ちわざわざ持ち込んでいる漆器の杯を口に運ぶ。

まあ俺ももう呆れたりしない、玖韻のこういった物言いは何時もの事だ、取りあえず相手に無茶を言いその反応を楽しむ。悪趣味には違いない。

「ハイお待ち」

その声と共に俺の前にも徳利と猪口が一つそれに海月の和え物らしきものが入った小鉢が置かれる。

まずは一杯。溢れんばかりに注ぎ、口を近づけ溢さない様に一息に飲む。

ああ、美味い。

「まったく、にやけた顔して、君って幸せだね。」

玖韻が新しい徳利を受け取りながら言ってくる。

「ほっとけ、何の憂いも無く自分の金で旨い酒が呑める。コレ以上の幸せがあるか。」

「枯れた十代だねキミも」

玖韻が顔に皮肉な笑みを浮かべまた猪口を口に運ぶ。

その後俺達は暫く無言で呑み続けた、元来俺は無口とは言わないまでもあまり喋る方ではない。玖韻はその辺りが適当で喋りたい時はとどまる所を知らず、さながら機関銃や鉄砲水のように喋るかと思えばピタリと口を閉じたまま何時間でも下手をすれば日長一日何も話さず終わってしまう事もある。どうやら今日は後者の方らしい。その後一時間ほど二人で黙々と酒を飲んでいた時、唐突に玖韻が口を開いた。

「キミはさ、薬用酒って知ってるかい？」

俺より早く来てその上俺より早いペースで杯を重ねている筈の玖韻だが少し頬が明らみ白い顔が益々白くなっているだけで他に変化も無い。

「薬用酒ってアレがよく宣伝でやっている滋養強壮とかのヤツか？」

あのずいぶん毒々しい液体、以前一度だけ飲んだことがあるが随分薬臭く不味かった覚えがある。

玖韻は首をふるふると振り違うよと言う。さらさらな黒髪が妙に艶かしい。

「もっと広義の意味での話だよ、例えば梅酒、杏酒、花梨酒とかね今は普通に水割りとかで楽しむけど昔は薬効効果を求めて作ったものだったんだよ。他にも沢山あるよ例えばウオッカだったらズブロッカとかさテキーラなら芋虫を潰込んだグサノ・ロホ、日本だったらハブ酒とかマムシ酒それに岩魚の骨酒とかもあるね、尤も最後のは薬用酒とは言いがたいけど。」

と、また杯を呷る

「要はあれか、アドヴォカートとかの事だろ？」

「いやそれは違うよ。」

玖韻がやんわりと否定してくる。因みにアドヴォカートとは卵とブランデーをブレンドした濃いリキュールの事でかなり甘い。俺は苦手だ。

「それを言い出したらリキュールやジンなんか皆薬洋酒の分類に入るだろ、まあ確かに元々ジンは薬用として開発された物だけども、ボクがここで言いたいのは何かモノを漬込んで造った薬用酒の事なんだよ、分かる？」

と、疑問調で投げかけてきた癖に俺の答えなど無視し新たに酒を注文している。

「それで結局何が言いたいんだ？」

玖韻が徳利を受け取り杯に並々と注ぎ、一杯呑んだのを見てからそう聞くと実に楽しそうな笑みを浮かべこちらに顔を向けると小声で切り出してくる。

「実を言つとね、最近面白い情報が入ったんだよ。」

一旦言葉を切りまた一杯。

「何でもね、凄い薬用酒があるっていうんだ、その名も首酒。」

「くびざけえ？」



「そう、何でも造り方は純度の高い焼酎或いはウオツカとか蒸留酒に各種動物の頭だけを、蜥蜴トカゲや蛇に始まって蠅螂カマキリや飛蝗バッタそれに亀や魚、終いには猿。つまりは脊椎動物から無脊椎動物までであるとあらゆるといえば言い過ぎだけど何種類もの頭を漬込み何年も寝かせて置くそうだよ、そうするとねゆつくりと頭から脳内麻薬とか各種ホルモンとか色々解明し切れていないような成分がゆつくりとゆつくりと染み出してきたえもいわれぬ味になるって言うんだよ、呑でみたいと思わない？」

思わず想像してしまう。

無色透明な液体が満ちた大きな瓶、そしてその中に浮ぶ幾つもの頭、どれもが恨めしげに此方を見ている。

正直かなりエグイ。

「俺は思わん」

俺の言葉に玖韻が心外だといった声を上げる。

「何で、人生は短いんだよ、次は無いかもしれない。呑める時に呑むべきだって。」

ふと、玖韻の物言いに俺は引つかかる物を感じた。

「おい、まさかその首酒とやら……………」

玖韻が喜色満面に頷く。そして大将に何やら目配せをする。すると三白眼どころか上下左右と四白眼の大將が厨房の奥に引っ込み何やら巨大な、一抱えはある巨大な瓶を台車に乗せ運んでくると店員と二人掛りで持ち上げドンという音を立てカウンターのの上にそれを置いた。

中の液体は赤黒く濁っており中に何が入っているのか全く見えな  
いが、嫌な予感がする。

「ジャーン、首酒登場！」

嫌な予感大当たり。

俺の嫌な顔も余所に大將が小振りな切子グラスを出すと瓶の下部  
に着いている蛇口を捻り赤黒い液体を八分目程注ぎ俺と玖韻の前に  
置く。

何とも言えない強いアルコール臭に混じって甘ったるい纏わり付  
くような、生生しすぎるほどに血腥い匂いが漂う。店内は静まりか  
えり俺と玖韻の動作を一挙手一投足見逃さないとばかりに見てくる。  
無理もない。いきなり赤黒い液体で一杯の巨大な瓶が出てきてその  
中身を飲もうというんだから注目しないほうがどうかしている。

そんな目を気にする様子も無く、玖韻が赤黒い液体で満たされた  
グラスを持ち上げ口をつける。白い咽が上下に動き一息に赤黒い液  
体は玖韻の口の中に落ちていった。

「つつう、結構野趣のある味だね、キミも呑みなよ。」

何でコイツはこんな怪しい液体を一息に、そう思いながらグラス  
の中を覗いた時だった、グラスに付着した一本の毛。

駄目だもう呑めない。

大將が言うには動物の頭は毛を落とし眼球を抜き下処理してから  
漬けるというがたまにはそり残しが在る事もあるという。

さらに良く見てみれば妙な鱗のような物や皮のような物、どろり  
と濁ったゲル状のモノ、兎に角得体の知れないモノが表面に浮んで  
いる。

赤黒い液体からは血腥い匂いと焼酎の匂いが混ざりあって立ち上  
ってくる。いつもなら恋焦がれるほど好きな匂いなのに、今日はも

う吐きそうだ。

その時、奇跡が起きた。

震度で数えれば大した事はない。せいぜい一か二だっただろう、ただ、カウンターを揺らし巨大な瓶を床に落とすには十分な揺れだった。

瓶が床に落ち派手に割れ、中身が出た瞬間店内は大混乱となった。それを、砕け散った瓶の中身を見た瞬間俺は床に吐き散らしながら気絶した。

二日後、俺と玖韻の二人は警察の事情徴集が終り帰途に着いていた。

あの時、瓶の中から出てきたのは玖韻が言った通り大小様々な生物の首、そしてそれに埋もれるように半分骨が覗き所々溶解し青白く膨らんだ人の首だった。

つまりあの店の首酒とは人の首をも漬込んだ酒だったわけである。帰り道の途中、呑んでもいないのに未だ吐き気が治まらない俺を余所に、その酒を呑んだ玖韻はといえば全然平気な顔で「結構美味しかったんだけどねえ」と言っていたが聞かなかった事にしておこう。

後日談になるが、あの店内からは他にも同じ処理を施した首が数十個見つかりその中には搜索願の出ていた行方不明者も結構いたらしい。当然の事だが店は閉店となり今では更地となっているが、玖韻はただ「良い店が無くなった」と嘆いている。

以上が焼酎を飲めなくなった所以である。

## 第一幕 出発？

「ご馳走様でした。」

「……………お粗末様。」

ぺこりと夜哀が頭を下げ銀髪がさらさらと肩の上を流れ落ちるのを何となく見ながら呆れ半分に俺は答えた。

あの後、冷蔵庫の中に何かあるかと見てみれば冷蔵庫の中はエビスビールスビールの500mm缶で一杯。野菜室は自家製梅酒が15？瓶で二本。冷凍庫の方はロックアイスと冷やしたジヨッキ、それにウオツカとジンのボトルが入っただけ。念の為に台所にある床下収納を見て見るとワインにラム、ウイスキー、ブランデー、カルバドス、各種リキュール、ジン、清酒、白酒、バイチュウ日本酒、焼酎が数種類ずつ、どれも抜群に美味しい事と引き換えに値段も抜群にお高いものと水割り用のケースに入ったミネラルウォーター、銘柄は夜哀一押しの竜泉洞の水。トニックウォーターが、それもどこから持ってきたのか日本国内じゃ流通してないキニーネが配合されているヤツが数瓶、各種柑橘類系100%ジュース、それも濃縮還元じゃあないモノが数瓶。後は小さな戸棚に入ったマドラー、ミキシンググラス、シェイカー、つまりはカクテルに必要な道具と細い足の洒落たカクテルグラスが数脚を筆頭にタンブラー、ショットグラス、杯、猪口、ぐい飲み、ロックグラス……………つまり食材は全く入っていないかった。普段何を食べて暮しているのかと考えながら買い物に出かけポークソテーにしようかと豚肉を買って買えと「今日はお肉の気分じゃない」と我俣を言う夜哀と暫し口論をした結果、俺が負け再び今度は野菜と魚介類を買って来て夏にも関わらず寄せ鍋を作ったワケだが……………

改めて鍋の中をしてみる。具が粗方終わった所で下茹でしておいた餛飩を5玉入れた筈だが、汁すら残っていない。

目の前で冷やしておいたジョッキにウォッカのビール割りという恐ろしいモノを、ビールに比べてウォッカの量が遥かに多い物を注ぎ嬉しそうに飲んでいる夜哀を見る。お腹が膨らんだ様子は外見からは全く分らない。一体この華奢な体の何処にあの大量の具と餛飩は消えて行ったのだろうか？

「でも湊ってちゃんとしたご飯作れるんだね。」

「材料と知識、ある程度の器用さと気力さえあれば誰でもできるよ。少なくとも愛情なんてモノはいらないしな。」

「そう？ボクは料理苦手だから。」

前に一度だけ見たことがあるが、少なくとも米を磨ぐと言って砥石でかき混ぜてみたり、包丁を持った方の手を切ってみたり、電子レンジを爆発させたり、台所を全焼させたり、一回の調理で調理器具を全て駄目にするのは苦手どころのレベルじゃない。というかそんな事を現実に出切るヤツがいるとは思いもしなかった。

夜哀が注いでくれたウォッカのビール割りを飲みながらそう思う。口に出した所で聞いちゃあいまいだろうからあえて言おうとは思わない。

ちなみにウォッカのビール割りは思ったより味が良いが、強いなコレ。目の前で夜哀が俺の数倍濃い物を平気な顔で飲んでいるのでそんな事言えないが。

「今日得した事は湊の手料理が食べれた事とエプロン姿が見れた事だね。」

ほつといて貰いたい。

何が哀しくてあんなフリルとリボンだらけの非実用的なエプロンを着なきゃいけないのか、エプロンはシンプルなのに限る。色はク口で決まりだ。

「ねえ湊？」

「あん？」

折角俺がエプロンについて考えているのに夜哀が話しかけてくる。因みに裸エプロンは好きだ。裸エプロンに関してはリボンとフリルだらけでも許せる。

「あの人覚えてる？」

思わず裸エプロン姿の夜哀を想像してしまいその想像をウォッカのビール割りと一緒に飲み下す。

「あの人って言われても該当するのが沢山いるんだけど、名前ですべてくれよ。」

「あのね、クインレイリ玖韻零璃さん。」

ブッ

その名前に俺の口から勢い良くウォッカビールが飛び出る。

「気を付けなよ、はいティッシュ。」

咳き込みながら口とちゃぶ台に飛び散ったウォッカビールを拭き同時に頭の中に零璃さんの事が浮ぶ。

クインレイ  
玖韻 零璃。

和服が似合う長身スレンダーな美人。そして俺を含むサークルメンバーが連続殺人事件にあった時の関係者というか犯人というか実行者というか……………そして少々罪悪感と呼べるようなモノを感じる人。

「……………あの、零璃さんがどうかしたのか？」

「うん、手紙が届いたんだ。」

「手紙い？」

「そう、何かねあの人の経営してる旅館の改修工事がすんだからその記念も兼ねて本格的なシーズン前にボクと湊を招待したいって。」

全身をぞわぞわと戦慄が駆け抜け鳥肌が立つ。

「……………夜哀、お前行くつもりか？」

「うん、この頃暇だったしね、偶にはあの人達と遊ぶのも楽しいんじゃないかな。」

「お前、今度は本当に殺されるかもしれないぞ？」

そう、脅しではなく多分、いや確実に殺されまではされなくても何かやられる。実際俺は前回逢った時殺されかけた。5分の3殺し位だ。

「大丈夫でしょ、ボクと湊の二人に勝てる生命体なんてそうそういないよ。」

この無根拠の自信は何処から……………って二人？！

「夜哀、お前……………まさか……………」

「うん、湊と二人でお伺いしますってもう返事出しといたよ。」

謀られた！

「もしかして、湊一緒に行ってくれないの？」

俺の氣勢を制するように、いや実際制して夜哀が哀願の目で俺を見てくる。左右わずかに色の違う深紅の瞳は潤み、雪の日に震える子猫のような目で……………いや実際にそんなラブリーなモノ見たこと無いが……………

「……………分かった俺も行く。」

想いとは裏腹に口がそう答えていた。

「湊ならそう言ってくれと思ったよ、ほら切符も同封されてたんだ。」

夜哀の指の中でぺらぺらと舞う切符を見ながらこの日俺は三度騙されたと思っていた。そろそろ自己防衛機能が働き夜哀に騙される事を喜びにすり替えそうな自分が怖い。



## 第一幕 出発？

翌々日、レポートだけ提出し、そのまま授業はサボリ駅に向かった憐れな俺は少し早めの夏休みと自分に言い聞かせ夜哀と新幹線に乗り込んでいた。向かう先は長野県。約三時間かかる道のりを夜哀とそれこそどうでも良い会話をして過ごした。例えば「坊主が屏風に上手にジョーズの絵を描いただったっけ、それとも坊主が屏風に上手に坊主の絵を描いただったっけ？」とか「イントロン情報の解析に関して互いに思う事を言おうよ。」とかアカデミックに聞こえるような聞こえないようなどうでもいい一々思い出すのも罵詈雑言のような話だ。

唯一気になった話も在る。途中の駅で子供が乗り込んできた時の夜哀の言葉だ。

「ボクね、小さい子供がキライなんだ。」

「どうして？」

「小さい子ってさ、全員が必ずしもそうじゃないけど大抵全身に希望が満ち溢れていて目が澄んで未来に向かって輝いているでしょ、ボクねそれを見るとどうしようもなく苛苛するんだ、あの未来に輝く瞳を濁らせて満ち溢れる希望の光を掻き消して上げたいと思うんだ。生きる事は苦痛だって教えて上げたいんだよ。」

もつとも小さい内から世の中の機微きびをわかっていて不幸を背負ったみたいな顔をしている子供はもつとキライだけだね。アレ？だったら子供は無邪気な方が良いのかなあ？」

と夜哀は何とも複雑な笑みを浮かべながらそう疑問系で閉じた。

何があつたかは知らないがあまり趣味の良い話ではない。生きる事が苦痛に満ちているという言葉に関しては概ね賛成できるが。果たして俺の今までの人生は苦痛に満ちていたかと考えみると……結構苦痛塗れだ。もつとも俺の主観的問題であつて客観的にみればどうという事もない人生かもしれないがそんな事はどうでも良い事であつて、要は俺自信がどう思うかが重要つて事だ。で、改めて俺自信がどう思うかと言えば紛れも無く今までの人生は、少なくとも夜哀に合うまでは退屈で怠惰で情性で動いているような緩慢な苦痛に満ちている。

さて、長野県は松本市に到着し、国宝の松本城や温泉等観光地を見る事など一切無く、タクシーというブルジョワジーな乗り物を駆使して俺と夜哀はソコに訪れていた。

陰陰滅滅いんいんめつめつと生い茂つた森が見えた頃。俺達はそこでタクシーから降ろされていた。理由は三つ。まず夜哀がタクシーの中で度々外の景色を眺めながら「あそこで事故が遭つたよ、二人死んでる」とか「さっきのトンネル大分迷つてゐるのがあるね。」とか嘘か真か知らないが、一般的に考えて知りたくないような情報を延々と口走り運ちゃんが辟易していた事。

俺も調子に乗って詳細を求めたから文句は言えない。

次にココから先車は入れない。歩いて行くか、根性があるならスキップや匍匐ほふくぜんしん前進でも構わないのだが、要は歩行者用通路しかない事。

三つ目に運ちゃんが本気で嫌がつたからだ。話を聞いてみれば幽霊が出るの怨霊が出るのUMAが出るの妖怪が出るの崇神がでるの不幸な目に逢うの、あの零璃さんの経営する旅館の近くとなればさもありなん。しかも話を聞いているとその旅館の存在は結構有名なしく泊まれば確実に妖しいモノが見られる或いは妖しいモノに関われると言う事で一部のマニアには大人気らしく固定客もいるらしい。俺と夜哀もそういったマニアだと誤解されたのだろう。

結構迷惑だ。

さて、夜哀曰く玖韻一族とは

全てを欺く者

黄昏に笑う道化師

リリスの末裔まっえい

血と狂気の中核

混沌を振り撒く者

月に吼える者

這い寄る混沌

とまあ上げれば切りが無く、字面を見るだけで碌でも無い連中だと言う事は痛いほどに伝わってくる。何でも夜哀の一族、つまり夢幻家は玖韻一族のライバルだという。本質的には同じタイプなのがそこはそれ、近親憎悪の言葉もあるように、自分に似ているヤツは憎らしい。という事で今までも裏表問わず結構ぶつかり合ってきたらしい。

何故らしいなのかと言えば夜哀が微妙に言葉を濁すからなのだが、詳しく知りたいという気持ちと知りたくないという気持ちがまだ俺の中で均整を保っている今はこの灰色のままで良いと思う。それは置いておくとしてそんな玖韻一族と夢幻家でも夜哀と澪璃さんは年齢も近く互いにライバル視しており今回の澪璃さんからの手紙は夜哀に対する挑戦状ともある意味言える。

そんな訳で俺と夜哀はさつきから夏の最中にも関わらず何処からか底冷えするような風が吹き、重い湿気が肺を満たす空気の流れる鬱蒼とした森の中辛うじて人の歩けるレベルに舗装されている道を歩いている。

タクシーの運ちゃんに聞いた所だとこの森、通称逢魔ヶ森おっまがもり。正式

名称不明。その名の通り下手に入ると魔に逢ってしまう森だという。磁気場が異常だと言う事でコンパスは使用不能。それどころか生物の生体磁石まで狂わすらしく元からここに生息しているモノ以外鳥や小動物の類も近寄らないという富士の樹海も真つ青な森だと運ちゃんは言っていた。さつきから木々の枝先から垂れ下がった先が

輪っかになったロープが妙に目につくのは磁気場が異常な所為だと自分に言い聞かせている。

「ねえ良いもの見つけたよ。」

夜哀に渡された凶悪に彎曲<sup>わんきく</sup>した形状が愛らしいグルカククリで草を薙ぎ払い踏み固めながら歩いていた俺はその声に振り向くと、夜哀が手に持った人らしき頭蓋骨を掲げて見せる。

「ほら、信長みたいに杯でも作ろうか？」

「…………捨てるそんなもん。」

そう言い捨て俺は草を薙ぎ払い柔らかい腐葉土や苔むした土で出来ている地面を踏み固めながら前に進む作業を再開する。ハンカチで拭って包み込んだ頭蓋骨を鞆に入れている夜哀の姿が見えるが何も言うまい。

今日の夜哀も相変わらずの姿だ。細身のレザーパンツに先の尖った黒いレザーブーツ。上はタイトなレザージャケット。前に暑くないのが聞いたら基礎体温が低いと言う答えが返ってきた。首にはレザーコードのチョーカー、スターサファイアのチャームが光っている。銀髪は何時も通り束ねたりせずストレートに降ろしたまま。顔には向こうが見えているのかどうかすら疑わしいほど黒いサンングラスを掛けている。

荷物は俺に背負わせ気楽なモノだ。とはいっても小振りなトランク一つだけだから楽な物だが。

何か後で言ってくる夜哀の言葉を適当にいなしながら歩く事約一時間。突然森を抜け開いた所に出た俺はそのまま呆然としていた。

「…………おい夜哀？」

「なーに」

「ここ……か？」

「そうじゃないの、他に建物らしい建物なかったし。それに住所もココだよ。」

唐突に立っている古めかしい立て看板に書かれた住所を夜哀が濡璃さんから貰った手紙に同封されていた地図に描かれた住所と見比べている。

……だからといってこの外観はどうだろう？

俺の立つ位置から巨大な屋根付きの門が見える。よく時代劇に出てくる大名屋敷の前に立っているアレだ。ただその奥が違う。門番もおらず開放された門の向こう側には何故か段々と大きくなる様等間隔に朱色んかくの鳥居あけいろが設置されている。遠目に見ても昨日今日に出来た新しいものではない。さらにその鳥居の奥にその屋敷はあった。

外見からは何とも言えないが何度も増改築を繰り返したのか一点を見ている筈なのにだんだんと視線が分散してしまうような。長時間見ていると頭痛がおきそうな古びた和風の屋敷がそこにはあった。こうして見ただけでは一体何階建てなのかすら分らないが、横にも縦にも驚くほど大きく幽霊とか悪霊以前にこの屋敷自体が怖い。一度見たことのある中国の九龍城くわうんじょうに似てなくもない。

さらに言うなら四国は道後温泉のアノ建物に似ていなくもない。つまり、九龍城を純和風に改造し数十倍複雑に数百倍禍禍しくさせた感じだ。

「……夜哀、今更何だが帰らないか？」

「それは駄目だよ、折角招いてくれたのにココまで来て帰るなんて

漣璃さんに悪いような気がしないようなするような。」

どっちだよ。

「それにこれからまた今の森を越えて行く？ボクは嫌だよ、それとも湊は疲れてもう歩くのがある日起きたら「キミ今日から世界連盟総理事長。就任オメデトーそれじゃ早速国家間問題全部何とかしてね、実費で」何て言われるぐらい嫌なボクをこんな万魔殿ばんまでんに置いて一人で帰るの？うわー薄情者、鬼、悪魔、外道、悪逆非道、鬼畜、ロリコンー」

まるで感情が籠こもっていない夜哀はらの罵詈雑言ののちごちごん。だが、一つだけ聞き逃せない言葉があった。

「待て、ロリコンだけは許せん。」

「どうして？前琉伽ちゃんルカの事可愛いって言ってたでしょ？」

ウッ

否定できない。

「ロリコンロリコンロリコンコン」

しかも歌うか……

けど琉伽ちゃんルカは十七歳。

十九歳の俺が十七歳の女の子を可愛いと言ったら性犯罪者のような言われ方を受けなければいけないのだろうか？

確かに幼い外見だが……

……  
まあ、いいや。

必死で「良いのか？」とつつこんでくる俺の半身は無視しておこ  
う。

しかし、後半の、今だ止まないロリコンの歌は兎も角前半部分は  
中々的を得ていた。いくら夏とは言えそろそろ日が暮れ始めている。  
生憎俺は日が沈んでからもう一度今の、先が輪になったロープが不  
自然な程に目に付く森を通ろうなんて度胸は持ち合わせていない。

それに慣れない道を歩いた所為か足が痛い。  
なま鈍ってるなあ。

「ね、さあ行こうよ。」

何だかサッパリした顔で、（アレだけ歌えばサッパリするだろう  
な）夜哀が俺の手を取り先に進む。

門を潜る時チラリと「忘我邸<sup>ぼうがてい</sup>」と書かれた看板が目に入る。

風も無いのにはさばさとはためく、屋敷の上に乱立する細い深紅  
の旗を見ながら口ではああ言ったモノの実際はコレから何が起きる  
か期待している自分に気がついた。

## 第一幕 遭遇？

眼下に石灯籠いしとうろうが見える。

屋敷の回りを囲む様に敷かれた石畳の回りを沿う様に石灯籠が並んでいる。

名前は全くわからないが様々な形の物があり、また中に灯りが入っていて仄かに光る様は中々風雅ふうがで見えていて面白い。

俺が何処にいるのかと言えば忘我邸二階らしき所の渡り廊下から中庭を見渡している。

あの後忘我邸に入った俺と夜哀は耀耶麻楓テルヤマカエデと名乗る和装のお手伝いさんに案内され既に夕食の用意の整った部屋に通された。

楓カエデさんは本来なら濡璃レイリさんが対応する筈だったがちよつと席が外せないと言う事で代わりに案内する事を恐縮していたが、俺としては在り難いの一言に尽きた。

取りあえず今日はゆつくりと寛くつろいでほしいと通された部屋は外見からは想像できない程に立派な和室だった。畳表も新しく青々とし、あの禍々し過ぎる外観からは想像もつかないほどに清浄な空気が満ちている。

夕食を終え夜哀は「お風呂入ってくる。」と言って地下大浴場に向かい、俺は一人部屋にいてもやる事がないので缶ビール抱えここであらうして夕涼みをしている。

何となく灯籠の数を数えていると涼しい風が吹いてくる。適度に湿った涼しい風が頬を撫で、廊下一杯に吊り下げられた簾がかかさど音を立て、どこからか風鈴らしき澄んだ鈴の音が聞こえてくる。

悪くない。

これがただの旅行なら言う事ないのになあ……………  
そんな事を考えている矢先だった。



「あら、湊様お久しぶりですね。」

その声に背筋が凍る。

首筋を冷たい何かがするつと撫でる。その感触に震えながら振り向く俺の眼前一杯に澪璃さんの顔はあった。

間近なんてもんじゃない、鼻の先が少し触れた。

「れっ……澪璃さん……」

後ずさる俺の姿を見て澪璃さんがくすくすと笑う。

肩を越す程度に伸ばされた真つ黒な髪、真つ黒な瞳、白い肌。夜哀が病的かつ異質な美人だとしたら此方は問答無用に人の美人だ。

ただし決して陽性の美人じゃない。陰性の、とことん陰性の美人だ。

あえて花で表すなら……ぎんりゅうそう銀龍草？

少し着崩れた黒地に朱の箆目模様が入った紬の胸元に覗く黒子がセクシーだが、この人にはそういった感情が全く湧いてこない。

「綺麗でしょう？この庭には今まで私達玖韻と遊んで下さった方々の屍が沢山眠っていますの、その陰火いんかがあんなに綺麗に……」

くすくすと笑う澪璃さん。

もしこの言葉が本当なら一体この一見風雅な庭には何百人の屍ヒトタマが眠っているのだろう？というかアレ全部人魂か。

「お元気そうで何よりです。」

「……澪璃さんも、お元気そうですね。」

再びくすくすと笑いながら右目の位置に在る眼帯に触れる。

「今日の午後はごめんなさい、ちょっと所用でお迎えして上げられなくて。」

こうやって話す分にはそつの無い同年代の女性だが、その本性は………エグイ。

「いえ、とんでもないです………所で目の方は大丈夫」

そこまで言って自分の迂闊<sup>うかつ</sup>さを呪う。

どんなに慌てていたって俺は絶対にその話題に触れてはいけな  
いの、いきなり触れてしまった。

「フッフ、湊様に合ったせいかしら、今とても疼<sup>うず</sup>いているの。」

「零璃さんが眼帯を外す。

右目がある位置にはポツカリと穴が空き暗いピンク色の肉壁を晒  
している。片目の無いその笑顔がまた綺麗で、怖くて俺はもう一歩  
後ろに下がる。

「……一つ聞いても良いですか？」

恐る恐る尋ねてみる。腫れ物、それも熱を持ち、膿が飛び散りそ  
うな腫れ物に触れる心境で。

「喜んで。」

凶悪に笑う髑髏<sup>むくろ</sup>が描かれた眼帯を付け直しながら零璃さんが頷く。

「その、何で俺と夜哀を招待してくれたんです？」

「あら、どうしてそんな事をお聞きになるのかしら？」

澪璃さんは虫も殺さぬといった笑顔を浮かべているが、その笑顔が怖い。現にこの人はその笑顔のまま俺の知り合いを再起不能にしている。

「……だつて……澪璃さんこの前別れ際に……」

そこで口を噤む。何だかさつきから俺は言っちゃあいけない事ばかり言っている気がする。

因みに分かれ際に言われた台詞は「今度は本気で遊んでさしあげます。」「この遊ぶの部分に普通は「殺す」とか「いたぶる」とか「いてこます」とか物騒な単語が入る。

「その事ですか、湊様覚えていて下さったんですね。」

内心脂汗だらけの俺を知ってか知らずか嬉しそうに言ってくるが、俺はちつとも嬉しくない。出来ることなら今すぐこの場から逃げ出したい。

「勿論、あの言葉は本気です。」

そう言った次の瞬間玄人裸足の足さばきで俺に詰め寄ると何処に隠していたのか小さいけれど鋭く研ぎ澄まされたナイフが俺の首筋に当てられる。

「そう、こうして話している今でも気を抜いたら湊様の肌を切り裂いて私が与えられる限りの苦痛を与えて上げたいと思ってしまふもの。」

ナイフがツツと下がる。シャツの釦が飛び皮膚を切り裂き胸に赤い線が一本。

「でも、湊様はあの夢幻の末姫に気に入られた存在、そして私の右目を抉ったお方。」

そう、零璃さんの右目は俺が抉った。言い訳する気はないがあの場面からすればどんな腕の悪い弁護士だって正当防衛で無罪を勝ち取れる。

零璃さんの顔が間近に迫る。俺はその右目に突っ込んだ指の感触をまざまざと思い出していた。想像以上に固く、ぶちゅつと音がして生暖かいゲル上の物質に人差し指と中指が包まれたあの感触を。

「私達（玖韻）と同等に遊べる相手は少ないの、だから私は湊様の事も夜哀さんの事も嫌いだけど大好きよ。」

ナイフが動き今度は横に一本線が引かれる。抵抗は出来ない。抵抗すれば次の瞬間このナイフが俺の喉を抉る。或いはもっと悲惨な目にあう。

折角ここまで来たのだから退場にはまだ早い。

ぺろりと零璃さんの舌が俺の傷口を舐め、俺を見上げる。

「フフッ甘い血ね。」

「……………血糖値は低い筈ですけどね。」

小さなナイフは何時の間にかまた何処かへ消え、零璃さんが俺から離れる。

「湊様、この目の事は気になさらなくて結構なんですよ。コレは私が貴方の事を甘く見ていたペナルティ、それに私の目を抉った時の湊様のお顔。とても素敵だったもの。右目一つ分以上の価値はありましたから。」

ウツトリとした顔で言ってくるが、俺はあまり嬉しくない。どんなに極上の美人であろうとこの人は余りにも規格外だ。

「この傷跡は湊様からの大切な贈り物、私の大事な宝物。」

「……相変わらず……跳んだ思考してますね。」

いとおしそうに眼帯を撫でる湊璃さんを見て強烈な皮肉を食らっている気がして思わず皮肉の一つも口にしてみるが。

「あら、そんなに褒めないで下さい。」

……向こうの方が上手だった。

「そうそう、妹も湊様と夜哀さんに会いたがってましたわ。」

「……琉伽ちゃんも来てるんですか？」

また俺の脳裏に芳ばしい記憶が甦る。

玖韻琉伽クインルカ、俺を殺人犯に仕立て上げ誤認逮捕させた恐るべき高校生。

「ええ、今度こそ湊様をオトスって張り切っていますわ。」

正確に言つのなら陥れるだ。

「それでは湊様、また後ほどお会いしましょう。」

何が面白いのか……多分俺が面白かったのだろう、くすくす笑いながら澪璃さんが渡り廊下の向こうに振り返ることも無く、滑る様に消えていく。俺はその場に無意識のまま腰を下ろしていた。胸の十字架が少し引き攣れたがそれ以上に澪璃さんの舌の感触が残っていた。……だからといって全く欲情できないが。

すっかり酔いも覚めてしまい部屋に戻ると夜哀はもう帰ってきていた。濡れた髪と少し紅い頬が艶かしい。

「あれ、湊何処に言っただの顔色悪いけど。」

「………久しぶりに怖い目にあったからな。」

「ふーん、湯上りのビールは美味しいね。」

俺の事など気にかける素振りなど全く無く、冷蔵庫から出した缶ビールの下に小さなナイフで穴を開けるとソコに唇を当て上のプルトップを上げる……ショットガンかよ……

「夜哀、お前一応女なんだからそういう飲み方はどうかと思うぞ。」

ちょっと気にかけて欲しかったな等と思いつつそんな事を言ってみる。

「あれっ湊ボクの事一応女の子だって思ってくれてるんだ？」

……なんだろうこのしてやったりの笑みは。

「一応も何もお前は女だろう?」

「あのねえ、世の一般男性はボクみたいになちよつと変った外見の美少女がこんなに無防備でいたらもう少し積極的に行動起こす物なんだよ?」

確かに美少女だが自分の事を自分で言うのはどうかと思う。

「……だから?」

「湊もね、もう少し積極的になってもいいんじゃないかなあって言ってるの。」

「そう言われてもなあ……」

俺を心なし赤い顔で見てる夜哀に食指が動かないわけではないが、さつき雫璃さんの毒気に当てられたばかりの今はとてもじゃないがそんな欲求は起きそうにない。

「湊って本当に淡泊だね、面白くない。」

何か言い返そうとしたが、やめた。

態々自分がいかに性的欲求がある人間かを語ってどうしようというのか。

「さて、俺も風呂入ってくるか。」

「それがいいよ、イイお湯だったからね。」

一瞬夜哀の口調に含みがあつたような気がするが、気のせいだろう。

タオルと備え付けの、胸元に大きく（歓迎！忘我邸）と入ったセ  
ンスの無い浴衣を持って行こうとする俺に夜哀が声を掛けてくる。

「湊ってさ、何か肉体的な接触を嫌がらない？」

俺はその間に苦笑だけを返した。

夜哀ほど波瀾に満ちていないかもしれないが、俺にもそれなりに  
色々あつたのだ。それなりに。



## 第一幕 遭遇？

「……ココは何処だ？」

大浴場を求めて歩く事約十分。俺は迷っていた。

何しろこの自称旅館は広すぎる。

どつという構造なのか見当もつかない。

部屋から持ってきた案内図も良く見て見れば明治漆<sup>めいじな</sup>年度版と印刷してあり見比べても通路が多かったり少なかったり、酷い時には在る筈の階段や部屋までもが在ったり無かったり、もっと酷い時には足の下に天上があつて遙頭上に畳が在ったりで、全く役に立たず、それでもコレしか地図が無いので破り捨てる事も出来ず、幾ら見比べても今俺が何処を歩いているかすら定かじやない。その上何処を向いても畳敷きの部屋と漆喰の白い壁と板敷きの廊下に襖と障子で構成された廊下が延々と続き性質の悪い迷路に迷い込んだ感じが、さつきから何度も階段を上ったり下ったりしている。

今いる所は螺旋階段<sup>ラセン</sup>をずっと下った末着いた場所だ。上を向けば天上は遙に高く薄暗い闇があるだけで見えない。俺は本当に建物の中にいるのだろうか？

漆喰の壁に埋め込まれた丸いガラス窓の向こうに朱色の鳥居が見えるが、多分この通路を通るのは3度目だ。目印に悪いとは思いつながら付いておいた小さな傷がそれを示している。

そもそも俺は地下にある大浴場に行くために階段を下った筈なのに何故気が付けばこんな高い位置にいるのだろうか？第一俺がさつきここに来た時は一度も階段なんて使わず部屋から真っ直ぐ来たら出てしまった筈なのに。悪夢のようだ。

無限ループに入りこんだような気さえする。しかもさつきから俺一人だけのはずなのに周りから視線を感じたり妙な笑い声や鳴き声

が聞こえて来たり、酷い時には廊下の隅や中庭に黒い影が蹲っていたり天上を妙なモノが逆さ向きで這っていたり、外の大鳥居の上から何だか表現しようのないモノが此方を見ていたり。流石は零璃さんの経営する旅館だ。侮れない………というか素直に恐い。

せめて方角だけでも知りたいと腕時計に付いたコンパスに目を向ければコンパスの針はモーターでも付けたかのように加速度的に回っている。失念していたが、ここはそういう場所だった。屋内にも関わらずだんだんと絶望的な気分になってきた。

そうだ！と思い出した携帯には無常にも圏外の二文字が浮び上がっている。

立ち止まって色々考えた所で物事は解決する筈も無く、取りあえず歩いていればその内どこかに出るだろうと楽天的な答えを出して歩き出した俺が耀耶麻さんに逢えたのはさらに三十分程迷ってからだった。

「そうですか、それは御災難ごさいなんでしたね。」

臙脂色えんじをした和装姿の、具体的には昔映画で見た大正、昭和初期のカフェにいた女給チックな格好の耀耶麻さんが俺の話に相槌を打つ。好きな人には堪らない。かくいう俺も嫌いじゃない。大げさじゃなく命の恩人じゃあなければ酔っていたら口説いてしまつかもしれない。

赤の強い栗色の髪を纏めた大きなリボンが妙に似合っている。

「本当に助かりましたよ、洒落しゃれじゃなくて遭難を覚悟しましたから。」

実際耀耶麻さんに声を掛けられた時不覚にも涙が浮んでしまった。

「無理ありませんね、この忘我邸の設立は古く、古代はかなりワ

ケ有りな墳墓だったと言われています。きちんとした建造物というカタチをとりだしたのは平安時代の終わりらしいのですが、それ以来約1200年、基部を中心に改修、改造、改築、増築を繰り返している上に漣璃さまの趣味であちこちに磁気発生装置や妨害電波発信機<sup>シグ</sup>を設置して人の方向感覚さえ狂わす様にしていますかし、電子機械類に至っては余程強固にシールドがされていないと使用が利きませんから。」

「あの……何の為に？」

耀耶麻さんはニツコリと笑い

「さあ？、きっと趣味だと思います。」

と言う。漣璃さんだ。

「多分お客様が館内で迷われて右往左往しているのを何処かで見るのが楽しいのでは無いかと。」

うん、琉架ちゃんが高笑いし、漣璃さんが優しく嗤っている姿がありありと浮かぶ。

「だから年末の大掃除は大変なんですよ、毎年白骨化したり腐乱中の遺体が数人分見つかりますから。」

楚々と笑いながら恐ろしい事を言う。

流石は漣璃さんの経営する旅館で働く人。この人も只者じゃない。それにしただってこの界限で一体何人死んでいると言うんだろ？

「所で耀耶麻さん。」

「私の事はホミジ栞とお呼び下さい。」

「そうですか……ってさつきカエテ楓って名乗ってくれませんでしたか？」

「それは私の妹です。」

「妹、ですか？」

「ハイ、私達姉妹はここ忘我館で溼璃様にお仕えしております、私が長女の栞。先ほど比良坂様と夢幻様をお部屋までご案内したのは妹の楓です。」

栞と名乗った耀耶麻さんが笑顔でそう言う。が、俺には正直その話が本当かどうかわからない。さつき俺と夜哀を部屋まで案内してくれた耀耶麻楓さんとやらと今俺の目の前にいる耀耶麻栞さんは似すぎている。

一卵性の姉妹かもしれないが似ているのは顔や背格好ばかりじゃない、雰囲気や間の取り方、声の質とかもそっくりだ。耀耶麻楓さんが栞と名乗って俺をからかっているとは思えない。

だからと言って同一人物ではなく本当に双子だという可能性も勿論ある。だからこの場合俺はどういう反応をすれば良いのかと云えば

「じゃあ栞さん？」

「ハイ、何でしょう？」

素直に耀耶麻さんの言う事に従う。考えて見れば一々反論する必要もないし本人がそうだと言っているんだからそれでいいじゃない

かという結論の末だ。

「それにしても随分似てらっしゃる妹さんですね。」

「そんな事ありませんよ、以外と似ているようで中身は全く違う物なんです。似ていると言う事は結局別の物という事ですもの、比良坂様も直ぐに見分けがお付きになりますわ。」

恐らく無理だ。

「そうですね……ところで大浴場は確か地下にあるんですよね？」

「ええ、そうですね。」

屈託なくくつたく桜さんが頷く。

「じゃあ何で俺達階段上っているんです？」

そう、俺と桜さんは先程から延々と階段を上っている。どう考えてももう十数階分は登っていると思うのだが、そもそもそんな階段が全く折れたりせず一直線に造られているのが不思議でしょうがない。

「大丈夫ですよ、少なくともココに関しては比良坂様より私の方がしっかりと知覚していますのでお任せ下さい。」

そこまで言うのだから桜さんを信用しよう。しかし……時計を見なくても分かる。俺が夜哀に風呂に入ってくると部屋を出たきりもう一時間以上経つ。きっと今頃何をやっているのかと思われるんだろう。

多分。

きつと。

……少しは心配してくれているよな？

……ま、ちよつと覚悟はしておけ。

「比良坂様、こちらが大浴場になります。」

結局俺は椀さんの後ろについて歩き一回も階段を下らない内に地下に在る筈の大浴場へ着いてしまった。

俺が質問する間も与えず椀さんは「ごゆっくりどうぞ」と言いながら去って行く。釈然としないまま俺は男湯の暖簾を潜り脱衣場へと向かう。

楓さんが部屋に案内してくれた時に説明してくれた通り今は俺と夜哀以外客はいないと言う事で脱衣所もがらんとしている。手早く服を脱ぎ浴場の扉を空ける。見事な岩風呂が中央に鎮座し、その回りにそれぞれ違う効能が記された小さな温泉が何種類も在る。中々良い風呂だ。露天風呂が無いのは少々残念だが、あの鬱蒼とした森を見ながらでは気分も凹みそうでかえって無いのは正解かもしれない。そもそも地下に露天風呂があったとしてどうしようというのだ俺よ。

岩風呂のお湯を手桶に汲みそつと手を入れてみる。全身猫舌の異名も持つ俺は熱いモノが駄目だ。温泉に限らず味噌汁やそう言うタイプの人間も。

熱くは無い。温い位だが俺にはコレくらいの温度が丁度良い。それに温湯にじつくりとつかる方が健康には良いそうだ。

そんな柄じゃないが。

傍らにある温度計を見ると37度を示している。

早速身体を洗い泡を流した後手ぬぐいを畳み頭の上に乗せ岩風呂にゆつくりと浸かる。

一杯に湛えられたお湯は俺が肩まで浸かると溢れ排水溝に吸い込

まれて行く。あまり硫黄臭が無く白く濁ったお湯に湯花が咲いている。

それにしても何だか今日は疲れた。肉体的にも精神的にも。肩を揉み解しながら唐突に漣璃さんの言葉が甦る。

（妹も逢いたがっていましたわ）

漣璃さんの妹こと玖韻琉伽ちゃんクインルカの事が甦る。琉伽ちゃんは夜哀と良く似た外見をしている。青白い肌に夜哀より少し蒼みがかった銀髪にアイスブルーの瞳。小さく華奢な子で外見はどう見ても、どう頑張つてサバを読んでも十五歳以上に俺は見ることが出来ない。因みに今年十七歳の筈だ。それなら問題ないような気もするが要はど

うやつても目付きと言動と行動以外は幼い外見なのだ。

さて、漣璃さんの妹なのに何故銀髪に青い目なのかと言えばコレにはちゃんと理由が在る。夜哀の血筋、つまり夢幻家が完全に少々特殊とは言え全員血の繋がりが在る事に反して玖韻一族は全く血の繋がりが無い。夜哀から聞いた話になるが玖韻は血筋ではなく家柄なのだそうだ。つまり玖韻家という玖韻の家も在る事はあるのだがそこに産まれた子供は玖韻一族かと言えばそうではなく、玖韻一族は見所のある人物をそれぞれ気ままにスカウトし、適正があるとなれば晴れて玖韻一族の仲間入りとなるらしい。そういう意味では家族というよりも秘密結社といった色合いの方が濃いかもしれない。まるで何処かの殺人鬼の一賊のようではないか。

だから琉伽ちゃんは漣璃さんより年下な為妹という位置付けだが、実際は血の繋がりの何もない。因みに玖韻の素質はどれだけ自分が面白いと思う事に他人を巻き込み躍らせ、如何に自分が楽しむ事ができるか。という事だそうだ。

こう言つとあんまり害が無いように感じるが、そうでもない。何しろこの玖韻一族は自分だけが面白ければそれで良いのだ。

自分が大笑いする為だけに戦争を引き起こし、大量虐殺を行い血

と狂気に哄笑を上げる者もいる反面、玖韻一族に共通する多大な力  
リスマを駆使し大々的な福祉活動を行ったりして博愛に微笑む者も  
いる。

因みに澪璃さんも琉伽ちゃんもどちらかにも明らかに間違い  
無く問答無用の言語道断で前者の方だ………というか夜哀が言うに  
は玖韻の九割九分九厘が前者らしい。

だから俺と同年代なのに玖韻の代表格の一人として数えられるよ  
うな澪璃さんや十歳頃には玖韻として覚醒してしまった琉伽ちゃん  
は正直怖い。

少なくとも自分の快樂の為だけにどんな禁忌も厭<sup>いと</sup>わない方向性は  
人として正しいとは思うが、どうにも許容するには難しい。

多くの善良な振りをしている世界や人々から見ればとことん異端  
で異形の一族なのは間違いない。なのに排他されないのはその存在  
があまりにも胡散臭く信じるに値しないモノのようにしか思えない  
からだ。

理解とか以前の問題でまず近い存在でもない限り認識する事さ  
え出来ない一族。そして例え認識できても次の瞬間にはその認識し  
たという事実ですら虚構にすりかえられている始末。

世界の影や闇に人知れず大々的に潜み、世界を裏から表から操り  
ちよつかいを出し緩慢に急速に狂わさせて行こうとする者達。

それが玖韻一族。

湯船に使っているにも関わらず思わず鳥肌が立ったのを機会に風  
呂から上がる。椀さんが態々書いてくれたらしい浴衣の上に置かれ  
た大浴場から部屋までの詳細な地図に思わず感涙しそうになった。

今度あったらお礼を言おう。

しかし、椀さんて凄い人かもしれない。

どう見ても鉛筆書きなのに製図機で作ったような平面地図と立体  
地図の二枚にそう思った。

しかし、ドコの意地悪なダンジョンだこれ？

殺人機械とか出てこないだろうな………





## 第二幕 招かれざる客？ side 虚祇

「嫌とは言わせない、僕達をもう一度ココに泊めさせてもらう。」

その男はレニエルさんに傲岸不遜な口調で言い切った。

細面に短く切った髪と眼鏡が妙に似合っているが人を見下したような印象を受ける顔だ。鴛淵先輩に少し似ていなくもないけど、目つきがかなり陰険な感じ。

「私は去年忠告しましたわ、この建物は呪われているから無理に泊まって何が起きても一切文句は受け付けませんと。」

幼い外見のレニエルさんが冷静に返した事で男と一緒にいた迷彩姿の一人はたじろいだような顔をする物のもう一人は面白そうに顔を歪め、細面の男は尚も食い下がる。

もう結構遅い時間なのによくあの森を越えてきたと思う。良く見ればズボンの裾や靴は泥で汚れ服もよれよれ、半袖の腕には細かなキズが幾つも見えて顔も疲れている。けど良く見て見ると一人だけ、細身のカーゴパンツに深紅の逆十字が刻まれた、半袖レザーシャツを着た男だけは疲れた様子が微塵も無い。短い髪をワックスで立たせていて整った顔だけど何か凄みが在る。鋭角的な形をした色の濃いサングラスがその凄みを強調させている。

細面に眼鏡の男は白を主とした地味な服装だ。どこことなく気障でインテリっぽい雰囲気はする。その後に長髪をひつつめて結わえた迷彩服の霞桜先輩ほどではないががっしり体形の男。靴も良く見ればジャングルブーツを履いている。言い表すなら一般人が想像する傭兵。

ただ一人、レニエルさんの応対に対して一人だけ鷹揚な顔を浮か

べているサングラス男だけが何か違う。

背が高く半袖のシャツから覗く腕は決して太くない物のガツチリと締まっている。私の直感が、長年の猫かぶりで築いた人物評価センサーが要注意の警報を大音量で鳴らしている。

「文句を言う気なんて無いさ、ただもう一度ココに僕達を泊めると言っているんだ。」

レニエルさんが一つ嘆息をし再び口を開く。

いい加減堂々廻りになってきた会話に終止符を打ったのは玖韻先輩だった。

「レニ姉さん、泊まりたい言っんだから泊まらせてあげなよ。」

「でも……………玲音ちゃん……………」

「良いだろ、何が起きても文句は言わないって言っんだから、なあ兄さん等、何が起ころうと一切こっちは責任とらないけど構わないんだろ?」

突然玖韻先輩が話し掛けた事に少し驚いたような顔を細面と迷彩が浮かべるけど直ぐに細面の男が大きく頷く。

「……………分かりました。」

それを見てレニエルさんも折れる。

「では宿帳のサインをお願いします。」

何時の間にか控えていた楓さんが宿帳を差し出し。三人がそれぞれ

れ名前を書く。生憎ここから名前は見えない。

「では鍵をお渡ししますが、如何いたします？何かお飲みになられますか？」

折角の楓さんの言葉も無視して細面と迷彩は筆り取る様に、レザ―シャツの男は丁寧な仕草で鍵を受け取る。足早にバーから出て行くかと思いきや急に足を止め玖韻先輩に細面が顔を向けた。

「お前僕達と逢った事が無いか？」

「フン、君等みたいな無礼者なんて知らんよ。」

ぐい飲みを傾けながら其方を見ようとせず鼻で嗤う玖韻先輩に細面の男の顔に怒気が過るが後ろにいた迷彩におさえられ、玖韻先輩を睨みつけて足早に今度こそバーから出て行った。

「……………何アレ？」

呆れたような声を出したのは太刀風先輩だった。

「無礼にもホドがありマース。」

「全くです、あーゆー手合いは少し痛い目に合わせた方が良いでしょう。」

キース、鴛淵先輩も憤慨している。

「……………」

霞桜先輩は酔いつぶれてテーブルにうつ伏せに突っ伏している。  
軒どころか寝息も聞こえず時々びくびく動くのがなんか怖い。

「それで、結局今の三人って何だったんですか？」

そうなのだ。さっき紅葉さんが連れてきた三人組みは結局のところ誰なのか、それが聞きたい。

「実はね、あの人達去年ココに泊まったお客さんなの。」

少し困ったような顔をしてレニエルさんが話を始める。

レニエルさんの話を簡単に纏めればこう言う事だ。去年の夏、とある伝手<sup>つて</sup>でココを尋ねてきて興味半分に泊まった結果6人で来た内の一人が変死、一人が行方不明のまま幕を閉じたそうだ。現役の大學生が二人おかしな事になっているのだからもつと騒がれても良い筈だが、喧騒を嫌うココの常連客で少々各方面に影響力の強いお客さん<sup>さん</sup>がもみ消してしまっ<sup>た</sup>らしい。

「きつとあの子達意趣返しのもりでできたんじゃないかしら。」

レニエルさんが何事もないかのように言う。玖韻先輩が言っていた通り変死自殺合わせて数百件ともなればもう慣れてしまっているんだろう。全く慌てている様子もない。先輩方も皆心臓に毛が生え<sup>て</sup>いるところか心臓が炭素鋼やチタン、動脈はナノカーボンチューブで出来ているような人達だ。私以外誰も気にしないらしい。

私はちよつと引いている。

「なんか白けちゃったわね。」

太刀風先輩のその言葉で今日の所はお開きとなった。今夜はもう

呑み始めてしまったし、皆疲れているだろうし霞桜先輩も酔いつぶれてしまった事を考慮してこのゲームは明日の午前中からと言う事になった。

桜さんは明日の朝食係と言う事で残念がりながら部屋に戻り、紅葉さんはもう暫く飲む様子の玖韻先輩と太刀風先輩と鴛淵先輩の酒豪トリオに付き合つと言い出し、私とキース先輩それにレニエルさんと楓さんは二階の喫茶室に移動して温かいアプリコットティーでもという話になった。

誰も霞桜先輩を気につけようとする様子は無く、ただ桜さんが何処からか持ってきた新聞紙を掛けていたけど結構涙を誘う姿だ。というか何で新聞紙……

そりゃ夏だから風邪はひかないかもしれないけど……ウチのサークルって友情があるようでいて無いのかも。

私もせめてうつ伏せの状態だけでも何とかしてあげようかなと思つたけど、朝散々言われた事を思い出して止めた。

喫茶室に移りマフィンを摘み、楓さんの煎れてくれたアプリコットティーを一口。幸せな気分だ。

「ミスレニエル、良かったら去年あつた事をもう少し詳しく教えて下さい。」

「あつ私も聞きたいです。」

レニエルさんと楓さんが顔を見合わせ苦笑めいた笑みを浮かべた物の「ではお茶菓子の代わりにお話ししましょうか」とテーブルの紙ナプキンを一枚広げると何人かの名前を書く。

書かれた名前は全部で六人、右の方から比良坂湊、片桐梧、火光いまふゆ、御厨美柚、間宮信士、高原詩遠。名前からだと言性か女性か判断しにくい名前が数人いる。

「去年ある人の紹介で泊まりに来たのがこの六名の方々です。先ほど私と話していたのが片桐梧様。その後にしたのが間宮信士様。もう一人の方は始めて見るお方でした。」

「宿帳には久我裁響とかかれておられます。」

楓さんが宿帳を捲りながらそう言った。レニエルさんはペンで片桐、間宮両名の名前を丸く囲んでいる……いまさらっと個人情報漏洩しなかったかな？

「この紙に書いてある順番で、比良坂様が一階壹號室、片桐様が一階貳號室といったようにお泊り頂き高原様だけは二階参號室に泊ま

って頂きました。」

「ナンデー階の陸號室と二階の壹號室、貳號室には泊まらなかったんデース力？」

「その日は個人的なお客様がいらして二階の壹號室と貳號室に泊まっていたので。一階陸號室はちよつと諸事情がありました。」

何時の間にか飲んでしまったらしく空になっていた私のティーカップにアプリコットティーのお代わりを楓さんが入れてくれた。

「皆様が宿泊された次の日の事です。二階参號室に泊まれた高原様が失踪いたしました。部屋の鍵も窓の鍵も、出入りできる可能性のある所の鍵は一切掛かったまま密室状態からの失踪でした。お泊りになった皆様と私達従業員総出で地下から屋上、周囲の森まで捜索しましたが結局見つからず今現在も行方知れずのままです。」

レニエルさんがペンで「高原詩遠」の上にバツを書く。

「本館の方は調べなかったんですか？」

「去年本館は改修工事の為一切立入が出来ないように処置してありましたが、間違っても本館に入ったという可能性はありません。それに改修工事が終わってから本館も調べられる限り調べましたけれど、結局見つかりませんでした。」

「アノ、警察は？」

レニエルさんがふるふると首を振る。

「ここ、忘我邸及び眩暈館は世俗に疲れた方々が多数御出で下さいます。その為ココでは一切の通信機器が使用出来ないようになっています。もし携帯電話を持っておられましたら画面を見て下さい。」

言われてポケットから携帯を引っ張り出して適当に電話を掛けてみようと思っただけ液晶には圏外の文字が浮んでいる。

「ソレデハ、もし急病とか出た場合は？」

「ご心配無く、楓は医師免許を持っています。専門は内科、外科、皮膚科、レントゲン科、放射線科、肛門科、耳鼻科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、整骨、整形外科、産婦人科、小児科、消化器科、一人で殆ど、肉体的な損傷に関してはどうにか出来ますから。」

楓さんが恥かしそうに頬を染めて俯く。

それ以前に今レニエルさんは物凄い事をさらりと言ったんじゃないだろうか？



「もしどうしても外部に連絡が必要な場合は特殊な訓練を施した伝書鳩がいるので心配なさらないで下さい。」

ニコリとレニエルさんが微笑む。

それにしても可愛い。

「さて、話を続けます。高原さんが行方不明になったその日。残った5名の方は意地でも探すと言いはりもう一晚宿泊する事になりました。結局その日皆様は夜遅くまで探していらっしゃいましたが見つからずそれぞれ自分の部屋に戻られ過ごされました。」

レニエルさんがアプリコットティーで口を湿らす。

「次の日の朝です。今度は火光様が死体で発見されました。朝になっても音沙汰が無いので昨日の事もあり私も一緒にお泊りになった皆様で火光様の様子を見に行った所高原様と同じ用にドアも窓もしつかりと施錠された密室状態の部屋の中で事切れておりました。」

「死因は何だったんですか？」

今まで黙っていた楓さんが口を開く。

「自分で言うのもおこがましい話ですが、私が見たところ絞殺か扼殺だと思われました。死因は窒息死だと思われるのですが、はっきりとした事は言えないのが残念です。」

「なぜ恐らくナノデースカ？」

「実は死体に首が無かったんです。」

レニエルさんが苦笑を浮べる。

「ベッドの上で火光さんは胸の上で手を組んでいました。首から下は綺麗なものでしたけど、首はボロボロでした。刃物で切ったと言うよりも無理矢理引き千切ったような感じで骨も組織もボロボロ、首の皮膚は引つ張られたのかべろんと伸びていました。」

お願いだから笑顔でこう言う事を言わないで欲しい。

「ソレデ……頭は？」

「多分相良様も虚祁様も本館の前で大鳥居をご覧になられたと思いますが、その上に乗ってたようです。実は首は最初見つかりませんでした。片桐様達が帰られて暫くした風の強い日に上から落ちてきて始めて首は大鳥居の上にあった事が分かったのです。酷い有様でしたよ。夏の最中でしたからどろどろに腐った上に鳥に啄ばまれてしかも落ちた所が石畳の上でしたので衝撃で頭蓋骨は割れて腐肉が飛び散って。掃除が面倒でした。」

「オオ、ソレはご苦労サマデス。」

掃除がどうこうと言うレベルの話じゃない。どうも私の感覚とレニエルさん達や先輩方の感覚には大きな溝が在るみたいだ。

「シカシ、どうして落ちてきた頭がミス火光のモノだと分かったのデスカ？」

「簡単な話です、実際に合わせてみましたから。」

「……………何をですか？」

「火光様の遺体は地下にある冷凍施設で冷凍保存していましたので、無事だった首の骨を合わせて見た所合致しました。」

「ちょ、ちよつと待って下さい。」

今レニエルさんは妙な事を言った。

何故火光さんとやらの遺体を冷凍保存していたと言っのだろう？

「勿論ちゃんとした理由があります。」

私の顔を見て疑問を悟ったのかレニエルさんがその理由を話してくれる。

「まず、火光様が天涯孤独の身の上と言う事でした。だからと言って勝手に茶毘にふすわけにも行かないので暫く冷凍保存しようという話になったのです。この事に関してはその日泊まっていた皆様からも了解をとってあります。それにコレは個人的な事なのですが、どうせ茶毘にふすなら五体満足な形でして上げたいと思ったのです。何しろココはそういった事故が多いものですから私の先代総責任者が地下にモルグモルグを設えたのです。」

レニエルさんと考えが通じそうな所を見つけて私は内心ほつとしたのも束の間「燃料費もタダじゃないですから。」という楓さんの言葉に頷くレニエルさんにがっくりと項垂れそうになった。

キース先輩が3杯目のアプリコットティーを貰いレニエルさんの話を急かす。

「ソレでその後ドウナリマシタ？」

「コレで終わりです。」

「終り……………デスカ？」

「私達が火光様の遺体を地下のモルグに運び、上がってくると書置きと宿泊料金を残して誰もいませんでした。きっと限界だったのでしょうね。」

レニエルさんが話し疲れたのか背もたれに身体を預ける。

「デハ犯人とか」

「ええ、一切分かっていません。犯人も、動機も、殺害方法も、密室の作り方も、首の切断方法も、その首をどうやって大鳥居の上に置いたのかも、高原様がどこに失踪したのかも、全て闇の中です。」

そういつて再びニコリと笑う。

ここでニコリと笑えるレニエルさんの神経に私はぞっとする。

「でも安心して下さい、ここではこんな事珍しい事じゃありませんから、寧ろ大人しい方です。記録に残る中で一番酷い物は一晩で四十人が血肉の塊に変えられましたから、そちらの方も全て不明ですけど。」

今更だけど帰りたくなってきた、でも夜にあの森を越える度胸は無いし。どうしよう、身の危険を感じるけど太刀風先輩の部屋に泊まりに行こうかな……………行ったら行つたで別の意味で怖い目に逢いそうな気がする。いや気がするじゃなくて怖い目に間違いなく遭わされる。

ああ、私はどうしたら良いんだろう！

「デモそんな事があつたのに良くまたミスター片桐達はキマシタネ。」

私の苦悩なんて知る由もないキース先輩が4杯目のアプリコットティーを貰いながら………って良く飲むなあ………

「ええ、私も少し驚いています、それにあの久我裁と宿帳に名前を書かれた方、只者じゃありませんね。」

レニエルさんの目がキラリと光る。

「ミーも同意権デース、あの目付きといい足運びといい素人の動きじゃアリマセン。」

キース先輩の目もキラリと光る。

言動は怪しいが巻き藁五本を一太刀で両断する居合切りの達人としてのキース先輩の目は本物だ。

見た事はないが聞いた話だと木刀で真剣を切ったり、真剣で自動車を両断した事もあるらしい。何故そんな場面になつたのかは聞けない。

私も最初嘘だと思っていたけど一度割り箸でスチール缶を両断するという妙技を見せられてからは強<sup>あなが</sup>ち嘘とは思えない。因みにキース先輩には何処で誰に付けられたのか知らないけど「剣<sup>カミヤスミ</sup>聖」なんて二つ名があるらしい。武器を持ったら先輩方の中でも1位2位の強さは間違いない。

因みに素手で一番強いのは霞桜先輩だ。打撃も恐ろしいけどそれ以上に捕まれたら次の瞬間投げらるか折られるか極められるか外されるか、五体満足ではいられない。これまた何時<sup>イツトコ</sup>何処で誰に如何<sup>いか</sup>し

てどんな状況で付けられたのかは一切不明の二つ名「武神」<sup>ドッポ</sup>は伊達じゃない。しかも必殺技とか生身の現実でいわれるとジョークのよ  
うにしか聞こえない技もあるという。

……初めて聞いた時は余りにも痛いジョークだと思った私に罪  
は無いと思う。

しかし、何で玖韻先輩も鴛淵先輩もキース先輩も霞桜先輩も太刀  
風先輩も頭脳と戦闘に関しては向かう所敵無しといった感じなのに  
他の部分はアレなんだろう？ バランスをとっていると言えばそれま  
でだが、もう少し人格とか性格の方にパラメータが寄ればさぞかし  
立派な人達だろうなと多くの人が思っている事は周知の事実だ。そ  
れにしても私ももっと頑張って先輩方みたいに二つ名で呼ばれぐら  
いの実力を身につけるべきなのだろうか？

というかおかしいよね、何で皆戦闘前提何だろうか？  
みんなたかうこ

「虚祁様？」

「はっはい！」

楓さんに呼びかけられ私は夢想の世界から戻ってくる。

「もう一杯如何ですか？」

「いえ、もう十分頂きました。」

白磁のティーポットを差し出してくる楓さんを丁重に断る。どう  
もレニエルさんの話を聞いている内に結構沢山飲んでいたみたいだ。  
お腹がタポタポ言ってる。

………うら若き乙女にあるまじき行動だったかも。きちんと猫を  
被りなおしておこう。

「オヤ、もうこんな時間デスカ？」

キース先輩の声に私も時計に目を向ける。時刻は一時を過ぎようとしている。

「ミスレニエル、ミス楓こんな時間までスイマセンでした。」

キース先輩が頭を下げる。鴛淵先輩に続いてマトモで紳士的なキース先輩だけの事はある。全く嫌味の無い仕草だ。

「いえ、構いませんよ私達も楽しい時間を過ごせましたから。」

レニエルさんがこれまたそつのない返答をして深夜のお茶会はお開きとなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3175p/>

---

忘我邸にて

2011年10月8日12時31分発行